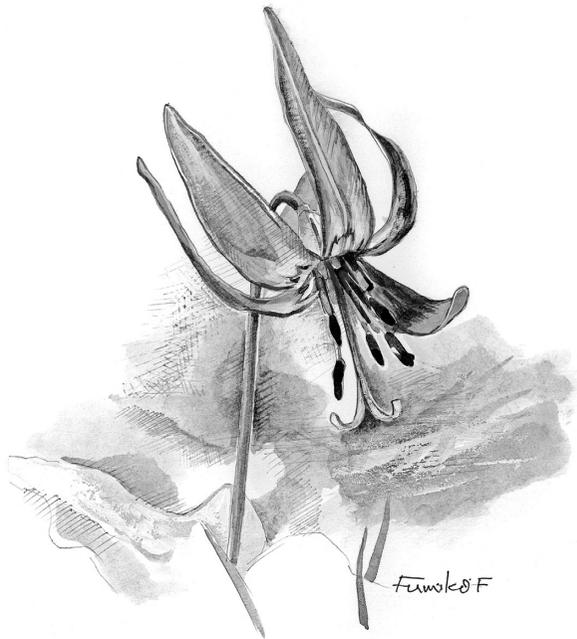


あきたの文芸第53集

あきた県民文化芸術祭2020 あきたの文芸第53集 入賞作品集

「あきたの文芸」

第五十三集



あきたの文芸 第53集 目次

●小説・評論

奨励賞

大文字の見える街から

雨宮 かつら

5

●詩

奨励賞

あの世に本は持っていけない

菅原 健三郎

奨励賞

学寮

いしざとゆうき

奨励賞

ありがとう

鈴木 仁

入選

渡辺 正子

鈴木 いく子

グリーン賞

葉月 祐

清水 虹海

八木 京

佐藤 叶実

清 水

●短歌

最優秀賞

秋田城趾

長澤 妙子

奨励賞

津の軽風

加賀谷 育

奨励賞

花の風

熊谷 すが子

奨励賞

夏の大地から

森野 奈津

入選

石田 幸栄

金万和

小松 芽

瀬下 京子

藤 榮悦

山田 愁眠

豊谷 敏雄

瑞穂

豊 葦

グリーン賞

33

19

●俳句

最優秀賞

奨励賞

奨励賞

奨励賞

入選

米作り

山陰の村

廃の跡

羽後掬情

松井憲一

秋野護

阿部清流子

小國弘二

板橋魁生

池田郷太郎

佐々木成

土谷敏雄

岸部吟遊

宮本秀峰

七尾理絵子

田村陽子

小塚宅右衛門

●川柳

最優秀賞

奨励賞

奨励賞

奨励賞

入選

揺れる想い

風の言葉

日新の葉

薔薇の唇

佐藤明子

藤原ぎてん

佐藤ちづる

菅原浩洋

佐藤啓子

澤田幸代

加藤円心

●エッセイ

最優秀賞

奨励賞

奨励賞

奨励賞

ゆずり葉とおしゃべり男

平気で生きている

お地蔵様のお祭りとおゲメダレ

雑木林の道の歌

佐藤清助

岸部ハマ子

小松紀子

春野昌和

●最優秀賞受賞のごとば

●選

評

工 ツ セ イ	川 柳	俳 句	短 歌	詩	小説・評論
------------------	--------	--------	--------	---	-------

澤井範夫 長谷川酔月 岩谷塵外 菅原恵子 堀江沙才り 渡辺修

中尾信一 高橋三鳩枝 和田京子 打矢京子 佐々木久春 大原かおり

柴山芳隆 宮腰流木 斎藤淳子 福岡勢子 成田豊人 山崎義光

●あきた県民文化芸術祭2020「あきたの文芸」応募状況

●あきたの文芸 昨年度の入賞者と作品名

小說・評論

小説・評論

奨励賞 大文字の見える街から

埼玉県朝霞市（大館市出身）

雨宮 かつら

一

昭和三十七年の冬だ。ゆりがいつもより遅くまで起きていた日のことで覚えているのは、まるでまるで薪ストーブが威勢良く燃えていて、着てきた緑のオーバーについた雪の白いふわふわがいつものまにか水の粒に変わり、くるんと丸くなっているのを見ながら、大人たちの話が續いているのを聞くともなく聞いているうちだんだん眠くなってきたことだった。一段高くなつたかまちに腰を掛けてぶらぶらさせていた足先のタイツの色が白だったような気もするのだが、話がなかなか終わらず、いつもならゆりたち子どもにも何かと声がかかるのに、全く忘れられたようになっていてその場の雰囲気には、五歳の子どもにもいわば変事を感じさせるもの

があったのだろうか。母の母が、脳卒中で倒れたしらせで、母の実家に駆けつけた夜のことである。

秋田県の県北のまちで、脳卒中で倒れる人が出るのは、冬の寒い日が多かった。「あ たったんだ」その言葉を何度となく聞いた。

以前から血圧は高かった。入院したこともあった。まるで血色よく存在感のあるひとで、時間があればいつも本を読んでいて、その頃のそのへんには、翻訳本を好んで読むようなひとなどいなかったという。ゆりは、座敷の布団の上に寝ている人を見舞ったように聞いたけれど、記憶の中にはその人の顔が浮かばない。

ゆりはその夜のあと時々この家に来た。仏壇の前に座り、飾つてある写真を見ても、その手に抱き取られたことがあるような記憶もないのである。最初の孫であるのだから、何度もあやされたことがあつたであろうに。

サトさんは、意識を取り戻すことなく彼岸の人となった。よくよく思い出せば、焼き場から戻り、家へはいる前に手で手を洗った時、母にならつて「とうさん」と呼んでいた祖父が、黒い服を着てひしゃくで水を汲んでくれた場面が切り取られたように絵になって浮かんでくるだ

けで、外に塩が白い皿の上に山盛りで置かれていたのを、なぜだろうと感じたことの方をよく覚えているかもしれない。昭和三十七年の二月のことだった。

祖母はその名はサトといい、祖父との間に五人の子をなした。上の二人が娘、三人が息子である。戦争が終わって夫が中国から帰つたあとで末の息子が生まれたので、昭和6年生まれの子であるゆりの母と末の弟との年の差は十七年ある。

祖父は鉄道員だった。大陸に行ったのも向こうの鉄道で働くためで、南京から命からがら引き揚げてきたという。まだ戦争中の機雷が海に漂つていて、中国と日本の間の海で、機雷に触れた船は沈んだのだそう。いよいよ沈むようになったとき、水泳の心得のある者は我先にと海に飛び込んだが、祖父は自信がなかったのと、なるようになれという気持ちからか、何人かの仲間とただじつとしていたのだそう。海に飛び込んだ人たちはおぼれてしまい、祖父たちは助けられて帰つてきた。

「だれに。」
とゆりが聞く。
「アメリカさんにや。」と答えが返る。

季節はいつで、上陸した港はどこだったのか、助けられたあとどんなことがあったのか、聞いたかもしれないがゆりは全然覚えていない。戦争が終わったのは確か真夏だ。引き揚げたのはいつだ。少し寒くなってきた頃だから、泳ぐのがためらわれたのだろうか。何人中、何人助け上げられたのか。詳しく聞けばよかったのに、その時は何の興味もなかったのだ。

成り行きに身を任せたか運命に挑んだかが、生き死にを分ける結果となったその出来事は、祖父の人生観の根っこの部分をつくりあげたようだ。大きくなったゆりが、思っていたのと違ってこんなことがあったとか、こんなことになるはずがない人に酷いことが起こったとか、世の中の不幸な出来事について、憤慨したり、嘆いたりするたび、祖父はきまって

「そういうことになるように、なっていたのや。」と言うのであった。ゆりは、学校に行くようになる、なんでも運命というような考え方は違うんじゃないかと思ったりしたけれど。暗い海原がどこまでも続く中、ようやく甲板まで出てきて、同僚に

「おれだば行がね。」と言ってそこに腰を下ろして海に飛び込む人を見送ったであろう秀次郎

さんの姿を想像すると、人間のできることはほんのちっぽけだというのも頷けるような気もするのだった。

祖父は、いつも柔和なひとで、母にいわせると、家の中のことはともかく、普通男がするよな家の外のこと、ちよっとした大工仕事や家の直しや、電気の球の取り替えさえやらない困ったとうさんで、全部サトさんの仕事になり、祖父はものの役に立たないのである。鉄道員は、出世するには、あちこちで経験を積む必要があるが、大館から出ないことを選んで、駅長にはとうとうならなかった。

大館の在の農家の次男だった秀次郎さんは、財産分けて山を一つもらっていたのを、サトさんの姉さんの夫で、同じく鉄道員をしていたなんとか兵衛に頼まれて、博打のカタに権利書を貸してやり、義兄はスッカラカンになって山はヒトのものになり、実家はすっかり頭に嫁さんの方とは疎遠になり、それをあまり気にする風もなく、義兄がどこかに頼み込んで探してきた借地に自分で家を建てて住んだ。

東大館の駅にやや近く、浄土宗の寺の墓地と道を隔てているところで、住み慣れて、サトさんが寺の大黒さんと懇意になって忙しいときは

代理で婦人会に出たりするようになると、住職に頼んで、檀家にしてもらった。秀次郎さんは、あの世を信じていないが、生家の宗旨は、太鼓を叩いて拝むのがうるさくて嫌いだったというのであった。だから、ゆりがお参りをしたことのあるただ一つの墓に最初に入ったのがサトさんということになるのだ。祖父は、宗教を信じていないと言いつつ、毎朝最初のお茶は仏壇に供えてから飲んだ。

ゆりは、お盆になると母に連れられてお墓参りにでかけた。一升瓶にお茶の葉を入れたのを秀次郎さんが持ち、ゆりはお花を持つ係、まんじゅうとか色鮮やかなせんべいとか赤飯とかの食べ物も少しづつ、小さい箱に綺麗に詰めたお供えも持って。墓地では、半分透き通った黒い衣を着たお坊さんがあちこちにおいて、線香の煙のただようお墓の前で鐘を鳴らしてお経を読んでいる。自分のところの墓でお経を読んでもらうために、順番待ちの人がそつとあとについて、よその家の供養をするお経が終わるまで頭をたれてじっと待っている。何人もいるお坊さんの中から待っている人が少なそうなお坊さんを見つけて、自分もその列にくっついて歩く。いかにも普段は学生ですというような剃りたて

の頭をした人には、就いている列が短い。

墓と墓の間に古い桜の木が何本もあるが、自分のところの墓のそばの木は見分けられる。すぐそばの地面に直接小さな石塔が立っていて、「官軍 秋藩 某の墓」と書かれているのが目印だ。お供えの赤い花がパッと目を引いた。

蟬の声がひときわよく聞こえる中で、叔父さんが首尾良く連れてきたお坊さんのお経に「石垣家代々のなんとか」があつて、「南無阿弥陀仏」が聞こえれば、ほぼ終わりだ。どの墓にもリンドウやオミナエシがみずみずしい色を見せているのを見ながら帰る。

二

もう一つ、ゆりに縁のあるお墓が秋田市にあるらしい。行ったことはない。そこに入っているのは床の間の横に掲げてある写真でしか知らないいかめしい顔をした紋付き姿の男性とその兄らしく、その昔「土族であつた」と、ゆりに分らない属性と共に語られるので、なんだか気むずかしそうに思える人だった。男鹿のどこかなまはげをやるようなところで、村長代理と

かを務めていた祖父は、いわばスカウトされて、大館にやってきて役場の商工課とかで働き、ガンにかかって現職のまま亡くなったという。役場に着ていった袴とかが大事にしまわれているのをゆりは筆筒の抽斗で見ることがあつた。

役所というのはわからないが、学校ならなじみがあつた。

ゆりが、学校というものの存在を知つたのは、毎日働きの行くところだつたからで、それは、「じむしつ」というところだつた。絵を描いてあそぶ西洋紙というのをよくもらつたが、同じ紙でもいたずら書きをしてはいけないのもあつて、それは「ごよごよ」とよばれて、手の届かない高いところにのせられた。ごよは漢字ではきつと「御用」であつたろう。のちに、テレビの時代劇の捕り物で「御用だ」を聞くたび、ゆりは郷愁のようなものを感じた。父は、職場で母と知り合い結婚したのである。

大館の役所に呼ばれて働いていた祖父の、大事な書類をいたずら盛りの子どもの手から守るために、若かつた祖母が「それは大事なもの」という意味で使つていたのであろう。父は、時々

秋田に行くことがあり、おみやげはきんまんと決まつていた。

写真のひとが、ガンにかかつて、弘前の病院に入院もしたが、いよいよ助からないとなつて家の座敷に寝ていたとき、毎日往診の医師が看護婦と共にやって来て、腹水を注射針で採る治療をしていったものだという。父と母が籍を入れるのを急いだのは、死期がはっきりしたからで、あとのりの長男に嫁を持たせて新しい戸籍をつくつたのだ。ゆりの母は、「わたしはまだ結婚しなくても良かったのに」とよく言つていた。病人がいるということ、結婚式も挙げず、花嫁衣装も着なかつたので、サトさんは、娘のために三十三の歳祝いはどうしてもやらなければとがんばつて、黒い裾模様の留袖を用意していたのだが、その丸髻姿を見る前に倒れてしまつたのだつた。

サトさんの死の一年後に、母は、歳祝いに参加した。お葬式があつたので、普通に鳥居をくぐることはできなくて、横から入って行って別のところで控えているようだったが。

男四十二、女三十三の厄年をめたい歳祝いと言ひ換えて、その年に当たる男女が神社にお参りをするのはずいぶん前から大館では行われ

ていたという。明治がおわるあたりから、正月に数えて厄年を迎えた人が、同じ年の二月一日を再び正月に見立てて、本厄を終えるため、神社でお払いしてもらい、お祝いをすると言う段取りである。ゆりは、母が、見慣れないかつちりとした髪型をして（多分カツラだったと思う）白く塗った顔がとても綺麗だと思ったのを覚えていたような気がする。

男は働き盛りで世に出ている。七五三やら成人式の祝いとは少し違い、親が用意するのが当然というわけではなく、自分の力で歩んできた道を振り返るということで、誇らしい気持ちになるだろう。女は結婚しているのが条件となると、それなりにお金のかかる留め袖をつくって着て、髪を結びあげ正装した姿で女の幸福を世間に知らしめるというような気張った感じもあろうか。

大館のこの伝統がどんな気持ちから発生し、継続していたのかを考えるのは、ここの人々の性質を見極めようとするときに結構大事なのかもしれない。やっぱり派手な事を好む気風があるのかもしれない。誰も何とも言わなくとも、自分は世間と張り合っているのである。娘がちゃんとした結婚式を挙げなかったことを、こ

こで取り返そうとばかりに、サトさんが張り切ったのは娘への愛情からだ。ゆりの負けず嫌いは、多分この遺伝なのである。

ゆりは、祖父の病床の姿を見たはずはない。ゆりが生まれる前にお墓に入ってしまったのだから。そのひとが病臥しているとき、上町あたりに住んでいた役所つとめの奥さんたちが、代わる代わる白い割烹着を着て手伝いにやってきていたと聞いている事と、毎月祖母に連れられていく「むじん」の時に見る女たちの姿がゆりの頭の中で重なって、病人をそうつとのぞき込む割烹着姿の女の人のイメージができあがっているのだろう。

ゆりの家は、桂城公園の隣にある。桂城公園は、大館駅から大きい道路を進んで、長木川を渡って、緩やかな坂を上ると、左手に見える崖の上にあるが、一本上流の橋を渡って長木川を背に穴門坂を上っていき、右側に桂城公園を見てそのみちをそのまままっすぐ行くと、すぐに道路は右に曲がっていく。右手には公園の堀が伸びていて、角には「じゃやなぎ様」のほこらがあった。

道が曲がり角で少し広くなっていて、ゆりはそこで馬車が方向を変えるのを何度も見物し

た。紙芝居屋さんが自転車を止めて子どもを集めるのもそこだったし、雪が溶けかかっていると、荒いむしろが道に広げられて、馬が通りやすいようにされたが、日が経つと、白い雪に馬糞が混じり黄土色になったところを馬が通って行くのは、勇ましかった。左の細い道に入っただけがゆりの家である。祖父が建てた家で、役所に通うのに便利な近さだった。

地所も買ったかったようだが、便利な土地なので、地主は売らなかった。近所の家は、役所に勤めているような人が多かった。

桂城公園は、遊ぶのにはもってこいのところだ、春には桜が咲いたし、いつから始まったのか、五月の連休には秋田犬の展示会もあって、ゆりは、乳母車を押す祖母に連れられ、おりの中をこわごわのぞいて歩いた。どの犬も賢そうな目をしてゆりを見返した。しっばがくるんと巻きあがっているのが、何ともかわいかった。

「うちで犬かわないの。」

ゆりが聞くと、おばあちゃんは、猫の方が好きだと言った。お父ちゃんが、小さいとき、うちにもシロというとても賢い犬がいたらしい。その犬が死んだとき、少年だった父は悲しんで三日もご飯を食べなかったのだという。それ以来

うちでは「生きものは死ぬからだめだ。」と
なったらしい。父の愛情には過剰な面があるこ
とを、ゆりは何となく感じていた。

近所の子どもたちが一群となって遊ぶ様子
その頃はあった。ゆりの家は板塀で囲まれ
ていたので、子どもたちもそうそう駆け込んで
は来なかったが、隣の家はしばらく空き家で、
それから新聞記者さんの上品な家族が社宅とか
で引越してきていて、家の前にはボール投げ
をできるくらいの平坦な地面があり、一本だけ
ある大きなごつごつした梅の木が、木登りを
するのにちょうど良かった。

集まって、木に登った日はわくわくした。ゆ
りも登りたかった。でも、近所の子どもの一団
には、日本は敗けてもまだ軍隊のようなちゃん
とした序列があって、その木の太い幹の上の
方、腰掛けのように楽に座れる玉座まで登って
いけるのは、一番年かさのまさぼちゃんだけと
決まっていた。まさぼちゃんだって、まだ中学
にはあがっていなかっただろう。それから、た
けしちゃんやおるくんやよっちゃんを簡単に
飛び降りができるくらいの高さまで、木に取り
付いて、順々と登って行って、ひろ子ちゃんも
女だけだとけしちゃんのお姉さんだからそこま

では登って良くて、あとのちびっ子の男児たち
と、こんどようやく小学校に上がるゆりとえり
ちゃんとは、下の方にある枝の切りあとを一つ
ずつつかんで、

「この枝はおれのだ」と言って満足していた。
えりちゃんは「わたし」と言っていた。毛虫も
葉っぱもなく、はだか木のようなことから、
きつと花の咲く前のことだ。昭和三十八年の春
の晴れた日の記憶かもしれない。

ゆりは、小学生になったら、自分もあの上ま
で登るのだと楽しみにしていたが、大きい子た
ちは、いつのまにか近所を駆け回って遊ばなく
なり、気がつくとも木登りの魅力は消えてしまっ
ていた。いつだって登れるけど、一人で登るの
はつまらないのである。

祖母は、ゆりをどこへでも連れて行った。ゆ
りと三歳下の弟は、もっぱらおばあちゃんに
くっついていて。母が父と同じように学校の事
務をして働いていたから。ゆりは「むじん」の
ことを、集まってご飯を食べることだと認識し
ていた。たまにゆりの家が会場になることもあ
り、祖母が大張り切りで、ぬたを作ったり、漬
け物を出したり、皿を並べたりする手伝いをし

た。こんなにやくやゆでたあさづき、湯を通した
イカを酢みそで和えるとき、すり鉢の端を押さ
えたり、味見をしたりするのは楽しかった。に
ぎやかになるのを赤ん坊は喜んだ。赤ん坊と
言ってもずっといずめに入っている時よりは大
きくなっていて、きつと歩いてもいただろう。
サトさんが死んだ年には、ゆりは六歳になるこ
ろで、弟は三つ下だった。

その頃は、毎日のように家に来ているタマ
ちゃんというちよつと色の黒い小母さんがい
た。「むじん」の時は、重箱に大きなぼた餅を
作って持ってきていた。町内の人の集まりだっ
たけれど、特別にいられてもらって、順番が来た
ときは、ゆりの家を会場にして会をした。

「むじん」というのは、集まってごちそうを
食べるだけでなくお金のやりとりが大事なのだ
とわかったのはいつだったのか。タマちゃんが
娘の学校のため、ダンナが出し渋るお金を「む
じん」で調達させてもらったことを、祖母と話
しているのを聞いて、だんだん理解したのか。
タマちゃんは、おばあちゃんのことを「おばさ
ん」と呼んでいた。

おばあちゃんの兄弟の娘なのと聞いたとき、
母が「仲人だったんだ」と教えてくれた。タマ

ちゃんは、あんまり自分の家にいたくないのでゆりのうちにやってきてお茶を飲んで、話をしていく。時々泣いている。おばあちゃんは、一緒になって「あのハゲ」の悪口を聞き、娘の学校の成績のいいのを聞いて感心し、話し相手がいるのが楽しそうだった。タマちゃんは、料理も裁縫も何でもできて、布団の側を換える時には、座敷の真ん中で綿を広げて、まっしろな綺麗な真綿を薄く薄くのばして行って、まるで手品みたいにぐるっとひっくり返して布団を作り、太い長い針に緑色の糸を通して所要場所を留めるといようなことを、いとも手際よくやっていた。ちょっと色が黒くて、髪の毛は艶のないパーマにしていた。

アゴが尖って、石鹸のマークのような三日月形の顔かたちだったので、口の悪いゆりの父は、かげで「何とか石鹸さん」と呼ぶこともあった。

「むじん」は、無尺講のことで、昭和のその頃は、とてもはやっていたらしい。町内や職場などで一定のお金を出し合って、順番にそのお金を全部もらう。全員がお金をもらうまで続ける。一回に出すのは少額でも、まとまればありがたく使いのある額になる。町内では、おば

あちゃんたちの楽しみ会でもあった。思い切りおしゃべりをして楽しめるのである。ゆりに面白い話はないしなかつたが、女たちのうわさ話や悪口の愉しさを感じていた。ゆりは、自分のミーハー性がここで養われたと思う。大きくなつてから、こんな話あんな話をどこかで聞いたと思ひ当たることがあつた。

ゆりはおばあちゃんに連れられてよその家に行くこと、まずきちんと正座して「こんにちをさせられた。あとは、何か食べ物をもらうて、弟と遊んでいただけだつた。三歳下の弟は、色白で、かわいい顔をしていた。「まあめんこいこと」というのは良かったが、そのあと必ず、「お姉ちゃんと反対だば良かったのに。」と続けられるのが嫌だつた。ばあさんたちは、遠慮なく

「ゆりちゃんは、目は大きいけど、鼻がちよつと低いものなあ。」と気持ちよさげに残念がつて見せ、「ゆりちゃんは頭がいいから、男に生まれて高校に行けばいいがったのになあ」「男と女と取替えれば良かったのに、そお思わねが。」とゆりに同意を求めることまでするのである。ゆりは、何と答えればいいのか分からなかつたが、幼いなりに心底悔しい思いをしてい

た。自分で望めばそうなるとも言つたのかと言ひ返したかつたのだ、本人にどうにもならないことを更に同意を求めらなつて、「理不尽」と言う言葉を後になつて思い当たつた。

ゆりは、何度かタマちゃんの家に行った。餅つきを見に行つた時、初めてタマちゃんのダンナさんの現物を見た。悪口を言われていた、役所に働いているその夫は、ベレー帽をかぶつたおしゃれた男性で、悪い人には全然見えなかつた。末っ子で一人息子で、母には頭が上がり、田舎出の妻をあまり大事にしなかつたのだ。

母という人は、近所でお葬式などがあると、その家へ頼まれていって、料理から何から全て取りしきるような立派な刀自で、タマちゃんはとても働き者だつたから家事には文句がありさうではないが。嫁姑はどうしても気が合わず、姑は娘の嫁ぎ先へ出かけ、タマちゃんはおばあちゃんのところにも来ていた。娘も三人生まれたというのに、気の合わない夫の悪口を好きなだけ言えるのは、ゆりのおばあちゃんも「漢字の七の字がどっちに曲がっているのか分からぬ」と言うくらいしか学校に行つていなくて、ごくひとの好い、気安いたちだつたから

だ。

ゆりのおばあちゃんの家は、船川の鍛冶屋だったということで、鍛冶屋をしている兄さんが袴をはいてよく大館に来ていたと母は言うが、ゆりは覚えていない。

共稼ぎだったから、ゆりと三歳下の弟は、このおばあちゃんに可愛がられて育てられた。

昭和三十七年の神明社の宵宮に、弟がもう一人生まれると、今まで父と母の間に寝ていたゆりは、おばあちゃんの部屋で隣に布団を引いて寝るようになっていた。

ゆりは、それまでもおばあちゃんの布団で一緒に寝ることがあった。弟が生まれた時には、おばあちゃんのおっぱいを吸ってみたことだった。それを言うと母はなんだか嫌そうにされたので、よくないのかと子ども心に感じたのを、あとでゆりは思い出した。

朝、目を覚まして、おばあちゃんが着物を着るのを布団の中から眺めている。何本も紐がある。使い込んで柔らかくなった紐がきゅるきゅると胴に巻かれて行くのを下から見上げていた。しゅっしゅっしゅと帯の上に音を立てて、最後の紐が巻かれる。寒くなると、薄い細長い布団に紐を縫い付けたのを「腰布団」と言って着物

の下に巻いて着ていた。小さい鏡台に向かって椿油を付けて髪の毛をまとめていた。この鏡台にはお歯黒の道具も入っていて、昔使っていたと言っていた。

ゆりは、申年なのだが、おばあちゃんも申で、しかも十二月生まれまでも同じだといつも言って喜んでいて。十二月十四日は「赤穂浪士の討ち入りの日」なのだそう、雪の降る中を「吉良」を倒しに行った話と、「トッピンぱりのぷ」で終わる民話のようなお話を繰り返してもらった。おばあちゃんからカタカナを習い、だんだんもつと字を覚えてくると、寝る前におばあちゃんに絵本を読んであげるようになる。いつも感心してもらった。ほめられた。「無尽」のおばさんたちを思えば、うちの中でだけ当たり前で、外では通用しない事があるのをゆりはだんだん悟っていった。親と一緒に時には言わないようなことを子どもは気づかないと侮って、平気で人は口にすることがある。ゆりは、気の強いのと人見知りとが交じった性格になった。

おんなじ干支ということ、ゆりが生まれたときおばあちゃんはおちようど六十だったということである。ゆりの三歳下の弟が生まれて、そ

のまた三歳下の弟を母が妊娠しているときにサトさんが亡くなったのだから、三人目が生まれたときには六十六だ、病氣もするようになり、孫三人の面倒を見るのはだんだん無理になってきた。

母は、ふくよかな美人さんで、元気で朗らかで頭も良く、お洒落が好きで、歌や朗読も得意で、字を書くとはめられていて、長女だったのでおばあちゃん子でサトさんの実家で従姉を「ねっちゃん」と呼んで月の半分はそこで過ごしていた。戦争が終わったときは、女学校に行っていたが、勤労奉仕であんまり勉強をしなかったという。疎開で東京から来た人たちは勉強ができたらしい。一学年上の女学生達は、群馬とかに集団で勤労奉仕に行かされたという。

サトさんは、学校に行くのは大事だと考える人だったが、妹は身体が弱かったため、看護婦の勉強をさせた。というのは、

「そのころ、公立病院の看護婦は、病院代がタダだったからや」と母は言う。妹は生まれてすぐ心臓の弁とかに異常がみつきり、身体もずっと小柄なままだった。サトさんは色々考えて、子どもの進路を決めたのだった。サトさんには三人の男の子が更に生まれ、長男・次男は普通

高校へすすんだが、大学に進学させるほどの資力はなく、就職のために結局関東へと出すことになったので、秀次郎さんが引き揚げてきたあと生まれた末っ子については、就職にいいと考えて、工業高校の電気科に進ませた。秀次郎さんが鉄道を退職したら、後を継がせようと考えてのことである。サトさんが突然倒れたあと、この末っ子は、工業高校に入學していた。妹は、姉と同じ女学校に行きたかったし、末息子も兄たちと同じ鳳鳴高校に行きたかったのである。とはいえ、おふくろは先々まで全部考えていたのやと、子どもたちも認めていた。

ゆりの父も普通高校を受験した。が、その前の日に山歩きをして、すっかり漆にかぶれて熱を出し、実力を出せずに落ちて、林業科に進学することとなった。卒業後に、祖父は岩手大学に進学するように言ったが、親への反抗心から、それを断り、木材会社に就職した。大正最後の十五年の三月生まれだったから、兵隊にも行ったのである。肋膜炎とか見つかった、内地で待機しているうちに戦争は終わってしまった。

ゆりの知っている父は、詩や小説を読むのが

好きで漢字でも歴史でも聞けば何でも知っていて、知らないことはムキになって調べていた。背が高く体格も良くて、ある時、迎えに来た父を見て、小学校の友だちのみえちゃんが本気で

「ゆりちゃんのおとうさん、ハンサムだな」と言ったことをゆりは密かに自慢に思っていた。きかん気の男で、一度言い出したことは決して引かず、ゆりが算数の問題などを聞こうものなら、いつまでも解き方を色々考えていたりして、途中でゆりが飽きてしまっても広告の裏紙に熱心に図形を書いていたし、かんしゃくを起すすと怖いところもあったが、おばあちゃん

は、
「ぼやちゃんです育てたから、だんじやく者になってしまつて。」といつも言っていた。

母は、結婚してすぐ祖父が死んだ日、父が薪小屋に行つて、薪をつぎつぎ叩き割りながら、近所中に鳴り響くような声でうおんうおん泣いていたとこっそり語っていた。おばあちゃんはおろおろして、傍に行つていろいろくどいていた、母はかまわねでおいたというのが、いかにも、であった。

進学を拒否して勤めた木材会社では、組合運動をしてクビになり、学校の事務の仕事は結局祖父が手を回して頼んで就いたものである。公務員となって働く中で、思うことがあつたらしく、

「大学には行かないと駄目だ」というのが持論となつていた。ゆりは、将来を聞かれると「小学校・中学校・高校・大学に行く。」と言うようになっていた。

しかし、女の子というのは、違つらしかった。「無尽」のおばさんたちは、ゆりの答にたいして感心してはくれなかった。「女の子はそんなに勉強しなくてもいいんでねが。」というのである。

タマちゃんは違う考えだった。亭主が学のあるのを鼻に掛けてタマちゃんを馬鹿にするのを、三人の娘たちには何があんでも自活できるようにさせたいと願っていた。大学を出て先生になるといのがその方法だった。昔なら、「師範」だったが、今は秋田大学に教育学部とある。亭主はその計画にあまり熱心ではなかった。学費や下宿代のためにタマちゃんは今で言うパートに出て働いた。ゆりの母が勤

めているのが定時制高校で、戦争から帰ってきた人たちが沢山入学してきて、生徒も教員も多かったらしい。大陸から引き揚げてきたり、都会から疎開してきたりして、教員免許は持たないが大学を出ている人たちが、教員として採用されて、その民間の職歴を勘案して給料を計算するのが母の仕事になった。夜の学校では給食も出し、その調理をする仕事がタマちゃんに紹介された。生徒の休みが出ると、余ったコッペパンを持ち帰って、ゆりの家にも時々持ってきてくれた。

ゆりは、新しくできた校舎に、母に連れられて遊びに行った。夜のうすぐらい体育館で、がっしりした男の人が、手に白い粉を付けて、重量挙げの練習をしているところを初めて見た。みるみる筋肉が盛り上がり、バーベルを持ち上げられると、一緒になってゆりの身体にも力が入った。

家から行くと、長木川とは反対側の方、米代川に向かっていると、一回坂を下って登った先に平坦な土地があつて、そこに新しい県立の学校が建てられたのである。新しい住宅も建っていた。市は、その先にも住宅地を広げる気があった。

三

昭和三十九年のいつだったか、おじいちゃんに「ごさいさん」が来ることになった。工業高校に通う末の息子とふたりきりでは、通いの手伝いを頼んでも余りに不便であった。ゆりが、タマちゃんとおばあちゃんの話から聞きかじったところでは、弘前のむこう、鱈ヶ沢という漁村の出で、一番年上だったので、いえと兄弟のため大滝温泉で芸者をしていたひとで、年はおじいちゃんより十ほど下だということだった。

ゆりは、

「芸者さんて、三味線弾くの。」と楽しみにしていたのだが、

「そういう芸者さんではなくて、身売りだ。」
としか言われず、なにやらわからないままだったが、あんまり追求できない空気を感じた。

おばあちゃんとタマちゃんと新しくお嫁に来たアサさんと三人がお茶を飲んでいたときのことを、ゆりは覚えていた。全然派手なところはなく、姿はすらっとして、もうすぐ五十になるという普通のおばさんだった。座っているとき

の姿勢がいいひとだった。いつものようにおばあちゃんは好奇心満々で、タマちゃんもすぐく真剣な雰囲気でお話し込んでいた。多分、アサさんの身の上話を聞いていたんだろう。

「お客さんの時間はどうやって計るの」

と聞かれて、アサさんが、

「線香に火を付けて、こうやって立てて、それが消えるまで」

と答えて、キセルに詰めた煙草に火をつけた。

アサさんは、全く化粧のない面長な顔で、皮膚が薄い感じで、あんまり表情が動かないように見える人だったが、それを言ったときに、すうっと顔がかけたようだった。タマちゃんは、話に真剣なあまりに、怖い顔になっていた。

「アサさんに、誰か所帯持つひとはいねかったの。」

「いたばって。駄目になったのし。」

「子どもはできねがったの。」

「別れてから、わがったばって、あその××さんで、しまつてもらった。」

××は、おじいちゃんの家に行く途中にある大きい産婦人科の病院のことである。『始末』という言葉が、ゆりの頭にさっと入ってきて、

その会話のその部分が、しんとした悲しみのような手触りと共に居座っていた。ゆりは、何でもちゃんと答えるひとなんだなあとなんだか感じしていた。

アサさんをおばあちゃんと呼ぶようには言われなかった。ちょっと遠慮があった。

アサさんはとてもいい人で、昼間は病気がちになったおばあちゃんに代わって、ゆりの二番目の弟を世話しに毎日来てくれた。

ゆりがなぜかよく覚えていてその年の出来事は、おじいちゃんが深刻な顔をして、

「章夫が学校で煙草を吸ってみつけた。」と母に相談に来たことである。新しく来た母になじめず、不良になったと言われたらしい。

応援団に入って、学生服の裏側に龍の刺繍が入っているのを見せて、ゆりたちに

「これは、先輩から紹介された店で、いくらいくらだったんだ。団長とか副団長とかにならないとこの模様は入れられないんだ」

などと自慢していく章夫ちゃんは、不良という言葉が似合わなかった。ゆりは、新しいお母さんが来るのは大変な事なんだと思った。

その年に母は妊娠していた。夏のある日、おばあちゃんがうちへ帰ってきて、

「また男だった。」と残念そうに言った事だけを蚊帳のしゃりしゃりした感触と一緒に、ゆりは記憶している。

その赤ん坊、つまりゆりの三人目の弟を産んだあと、母は、仕事を辞めて、家にずっといることになった。父は、母の最後の給料袋を仏壇に上げて、正座して、

「今まで御苦労であった。」と頭を下げたのだそう。

「勤めに行っているときが一番たのしかったのに、お父ちゃんは、外で働かせたくなかったんだな。」といつも言う。古くせえ男だなあとゆりは思う。

しかし、ゆりの男性観に父はかなり影響しているのである。ああ、父よ父よ、汝をいかにせん。

いままで、赤ん坊がいても、大して特別に思わなかったのに、赤ん坊は、末っ子として家中から可愛がられた。おばあちゃんはそれほどでもなかったが。

ゆりは、小学校二年生で作文を書いた時の誇らしさをずっと覚えている。

「わが家は七人かぞくです。お父さんとお母さ

んとおばあちゃんとおとうとが三人います。わたしは、みんなから、ねっちゃんと言われています。おとうとの名前は、耕平・淳平・龍平です。平がつくのは、おとうさんが、せんそうがおわって、やっぱり平和はいいとおもってつけたからです。

こうちゃん、じゅんちゃん、りゅうちゃんとよびます。こうちゃんはおにいちゃんともいいます。一ばん下は、ちびことかめんこちゃんともいいます。」

誰かが泣いたり、騒いだり、仲直りしたり、怒られたり、ゆりがヒステリーを起こしたり、誰かが病気になったり入院したり、色々起こった。弟達は、ゆりより運動が得意で夏は野球冬はスキーと活躍していた。ゆりも中学では運動をしようとみえこちゃんと一緒に卓球部に入ったのに、父が五時までに帰れとうるさくて、夏休みの前に辞めてしまっていた。差別待遇も甚だしいがどうにもならない。まあ全体とすればにぎやかに平穏に、その家での日々が過ぎていった。

そういえば、家の前の路地からは、まっすぐに鳳凰山が見えた。この山の中腹に「大」の字を刻んで、八月十六日に火をつける大文字焼き

が、明治百年を記念して、昭和四十三年に始まった。暑い暑いと言っていて、お盆が過ぎると、急に風が涼しくなる。夏休みの終わりが迫ってきて、学校が始まるのはちよつとうれしけれど、祭りのあとに夏を惜しむさみしさが心に生まれてくるのだ。

四

さて、作者は、ゆりの思い出から、長じてゆりが考えずいられたかったこと、たとえば、女はどう生きていくのがいいのかとか、若者は秋田から外へ出て行く方が生きやすいのかとか、家族に血のつながりは必須なのかとか、経済的自立は恋愛より先とか、あれとかこれとかの問いが、どこからゆりに住みついたので探してみようとしたのである。性格やら行動やらが、あるいはいざというときの決断やらが、どんなふうにして自分の内側からわき出てしまうのかを、きつとどこかで取捨選択されたからこそなぜか忘れられない思い出を語ってみることで、振り返って整理したいと思ったのである。

ゆりは、小・中を終え、高校二年生になるまで、桂城公園の隣に住んでいた。そのあいだにおばあちゃんは急に年をとり、弱ってきた。十二指腸とかで入院もした。

ゆりも成長したが、弟たちもめきめき大きくなって、金曜の夜にテレビの前に三人が並んで体育座りをして、プロレスを見ている時だけは静か、みたいな、頭一つ分ずつ高さの違う後ろ姿がパツと脳裏に浮かんで、今でもにやにやしたくなる。ゆりは、なにかに熱中するのを見ているのが好きなのだ。

きょうだいのうちで、一番うえというのは、なかなか苦労なものである。高校を出たらどうすればいいか、大学に行くというのはどんなものなのか、兄や姉のいる高校の同級生がうらやましい。タマちゃんの娘よりほかに大学に行つた人と話したことはなかったし、だいたい大館から汽車に乗って出かけたこともほとんどないのである。クラスメートは、東京の大学を考えているようだったが、ゆりの下には弟が三人いて、父は全員進学させると決めていた。秋田大学から、秋田で先生というのが父のおすすめコースであった。

タマちゃんは、小学校の先生になった長女に

呼ばれて、千葉に行ってしまった。次女と三女は共に秋田で教職に就いていたが、二人とも県内で結婚していた。長女は、タマちゃんと住むために郊外に一軒家を買ったとのことであった。やがて、小包で、名産の落花生が送られてきたとき、送り主が、幸田八重となっていたので、ゆりが誰のことと尋ねたとき初めて、タマちゃんが本名ではないことを知らされた。

タマちゃんの立派なお姑さんが、

「珠のように角のない人になって、内藤の家の嫁にふさわしいように」と、嫁に行ったその日から珠子と名を変えたから、みんながタマちゃんと呼んでいたのであった。ゆりは、ビックリしたのとタマちゃんと呼び続けて済まなかった気になった。今、自分の名前を取り戻し、娘と二人暮らすことになったのは、さぞやうれしいことだろうと思われた。ゆりだって、アサさんの仕事に分かるようになっていたから、女が女を売らずに生きるのは大変だとも、これからの私たちは違っても漠然と考えていた。

ゆりが高校二年生の夏に、ゆりの家は引越した。母やタマちゃんが勤めていた高校の先に広がる市の分譲住宅地の、最後まで残っていた一区画を先のためと思って買ったところ、二年

いく。

ゆりは、ようやく退院して家に帰り、学校にも戻った。家からは、近くの山に隠れて大文字は見えないが、高校の帰り自転車走って街に出るとき、ふりかえると鳳凰山の大的字が五月の緑の中にはつきり見える。520mの小学校の時に登ったきりの山だが、ここで育ったゆりにとって、大館を象徴する山なのだ。このまちはぐるりを山に囲まれた盆地だと、大町の交差点に立てばすぐ分かる。見慣れたこの地から、どこかに、何かなりに、行かなければならぬ。

おばあちゃんは仙北から来たと言っていた。母のきょうだい達はみな、横濱とか横須賀とかに働きに行つて、秋田県には戻らなくなった。タマちゃんは総武線の沿線が終の棲家だ。

「みんな生まれた場所から離れてやってみるんだ。」

とゆりは考えた。力いっぱいやってみるんだ。

了

詩

詩

奨励賞 あの世に本は 持っていない

仙台市(潟上市出身)

菅原健三郎

いつか年金暮らしになったら

晴耕雨読もよし 読書三昧もよし

そのいつかがとうに過ぎて

この本をどうするの

あの世に持っていないのよ

と 妻から小言三昧の日々

活字が小さくて読みづらくなった本

枯れ色に焼けた文庫本

青年期の悩み多き本

仕事盛りの強くなる本

定年近くなつての人生訓の本

現在に置いてけぼりされた百科事典の類

先人の教訓であり

人類の知恵であり

私の趣味であり

老い先短くとも生きる指針であり

などとは口に出せないが

かつて読んだであろう

たくさんの本が

今の私を作っているのだ

たぶん

捨てようと取組んでみるのだが

読み切れない本は

あの世に持っていないだろうか

と ついつい読むべき本に仕分ける

どうせ読む先から忘れるのだから

読まなくても一緒でしょ

と 的を射ての口撃に両手を上げたくない

終活はまだまだ先でいいと思うが

慣れが必要でしょと不審の笑み

それでもまずは紙袋にひとつ

いざ捨てるとなると

なんだこのざわざわする胸の内は

妻に言い返せない

うつうつたる気持ちか

読むべき時に読まずに来た

後ろめたさか

あるいは読んだであろう本の

つぶやきだろうか

※口撃：言葉による攻撃のこと

奨励賞 学寮

我が学寮よ

秋田市 いしざと ゆづき

似たような夢を見る

どうしようもない

後悔を伴って

貫徹

取り損ねたものが

恥 後悔などを

そろそろと引き連れて

形を変えはするが

似かよった夢だ

どの辺りを歩いているのだろうか

あれから いくらかは

進めたのだろうか

畑の向こう せり上がる海

この世のものとは思われぬ

青海原よ

学寮をあとにして

しばらく 私は彷徨い

世の片隅に

幾人かのイカロスたちを見た

負い目から

あるいは 矜持からか

胸に 何ものかを仕舞い込んだ

ああ

封印したはずの水底から

浮かびあがる幻よ

そこに憩えば 私らしい私を

取り戻せるような

パレードクス

だが

それで良い

見失いそうな矜持を

取り戻さなければならぬから

それを知ってか 知らずか

ふと 鮮やかに立ち昇りくる

ああ 永遠の依所なる

奨励賞 ありがとう

―最前線の看護師へ

大仙市 鈴木 仁

時間が欠如している

それでも

夜空の星々が

ギリシャ神話を語る

ずっと以前に

君と出会っていた事を

健忘症の僕は

今朝ようやく気づいたんだ

たぶん

今の僕が君で

僕の名前を忘れていても

君が笑った瞬間に

不安の雲に覆われた

世界の空に

日は射すだろう

たとえ

どんなに手強い病気でも

君の言葉が薬となって

心に勇気の力をくれる

きっと

叫びたくなる痛みさえ
君の元気に癒やされて
僕は何度も蘇る

ありがとう

新型の

コロナウイルスが

地球を赤く染めても

伸び始めた日の長さに

小鳥達は

春の歌を忘れなかった

けれど

残念なことに

この病室の窓を横切る

夏蝶のつぶやきが

厚いコンクリートの壁で

聴き取ることが出来ない

父の遺した

柱時計の鳩が

夏の休暇をとったので

この世界には

入選 病を飼う

能代市 渡辺 正子

病を飼い始めている

飼い慣らす

透明な病だ

そして

まだ悪さはしていない

閉じ込めた

けれど

なんだか息苦しく

一日中心が重いつきがある

迷子にならないよう
付き添う

老女との病院で

不安は病の餌になる

病とふれあつた

空洞な心に

ドクドク入り込む

四角い部屋で

ただ

朝を待ちながら

恥ずかしいことに

消毒液や

突き放せない

廊下を走る足音で

孤独な私を唯一解せる

数ある病を知つた

友のようで

小賢しい病は

けれど

いつの間にか

支配されたら

疲れた心に

私は私でなくなる

徐に近づいてきた

闘うつもりだ

隙だらけの心が

呼び寄せたようだ

私には

介護する老女がいる

恐しいことに

だから

入選 人生道楽の勧め

秋田市 田 口 夏 音

明日さえも放り投げたままなのに
イヤホンから流れる音楽は未だポジティブ
両の手のひらを見つめ右から順に

親指

人差し指

中指

薬指

小指

小指

薬指

中指

人差し指

親指

そこは底抜けに空っぽで

静寂と脆弱に支配された底なし沼

だらしのない生命線と肌の赤みや

動脈の緑 静脈の紫

すすけた赤黄色の頼りない皺が
影の暗闇に飲み込まれているだけ

そんなネガティブも全て愛して

今日の夜はスピーカーを使う

明日の朝は失恋ソングでも聴いてみようか

私は一体何をしていた
私は一体何をしていた

空虚への焦燥と不安

自らへの憤慨と失望

風がひと吹き

視界の上端で前髪が揺れた

両の手のひらを見つめ太陽にかざす

その扉を開けば青い空が広がり

あまりの無垢さに眩暈と吐き気を覚える

それでも世界はこんなにも偉大

期待以上の神秘と

擬態傾向の強い縦社会

それでも世界はこんなにも偉大

きっと私も生きてゆける場所なのだ

私は一体何をしていた

私は一体何をしていた

若干の倦怠感と劣等感

申し訳程度の一筋の飛行機雲

入選 道の途中で

秋田市 鈴木 いく子

ウグイスの囀りに

耳を奪われながら

蝉の合唱の雨に降られながら

風に吹かれる木々が

大きく揺さぶられ

葉がざわめくのを

感じながら

今に集中するようにして

自分の心の中が忙しい時は

すっかり忘れていた

三日坊主の初心のように

ただ、まだ続いている

道が続いている限り

そういえば

その扉がどこに続いているのか

誰かから聞いたことはあるけれど

確かに知っているかと問われると

そうではなく、ただ見つけただけ

それ以降、毎日、注意して

観察してみることにした

朝に見て、夕方に見た

そして次の日の朝も夕方も

注意しながら見た

入選 花 祖母の教え

大館市 葉月 祐

やさしい言葉で
語られた 教えでした

そうして この夏

永遠の眠りについた

祖母という一輪の花は

いつまでも いつまでも

わたしの中に 咲き続けるのです

花は

枯れても花だと

ほほえみながら

祖母は言いました

花びらや葉が

シワシワになり

カラカラになろうと

花は 花であるように

たとえ死んで骨になっても

人はいつまでも人だから

自分はずっと自分だと

言い聞かせるように

祖母が 言いました

それは

願いのような

祈りにも似た

ここに咲いていたことを

誰かが きっと

憶えてくれているから

忘れ去られることは

ないんだよ と

やわらかな声で

祖母は 言いました

おだやかな日溜まりの中

わたしは

ほほえむ祖母のとなりで

やさしい教えに

耳をかたむけていました

あの日のふたりは 人であり 花でした

入選
虻鑿の寿命

由利本莊市 豊島 カヨ子

吹雪の日

久々に 独り暮しの老女を訪ねた

たわい無い会話の中で 突然

貴女 「虻鑿の寿命」の話こ

知っているか と問われた

若げ大工 仕事してたごさ

「ブーン」て 羽鳴らして

一羽の虻 飛んできたけど

そして背中さ ぴたっと止またけど

虻め 刺されてたまるかと

持がでた鑿を 思いきり振り上げて

追っ払らおうどしたば

あえっ 手もと狂て

どっちり 我の背中ごこ

突いでしまたけど

大工あ 血だらけになつて

息 絶えただけど

——人間は な 死んでみねば
その死に様な誰も分らねもんだど
と いうごどなんだどよ

齢八十余のすばめた口元から
漏れ 滴るような
老少不定を 眩きながら
わたしの目を覗きこむように
じつと みつめた

戸の隙間から かすかに羽音を含む
白い風が 背を撫でる
合の手を入れることもできないまま
胸奥のことばを のみ込む

ひと息ついて 眼を細めた老女は
雪にふちどられた窓を見あげ
——ああ 早ぐ 春 来ばえな
と からから笑った

グリーン賞 ノート

鹿角市 空音樹

奏

書きなぐったりして

自分を詰め込んだノート

嬉しいことや楽しいことは

ノートに綴って

悲しいことやいやなことは

書きなぐって 書きなぐって

逃げ場のない気持ちをつめこんだ

一冊のノート

自分だけのノート

読み返したら恥かしいけれど

それでも笑える優しいノート

現在（いま）を綴っていく

現在（いま）を書きなぐっていく

心のノート

好きなこと 好きなもの

嫌いなこと 嫌いなもの

全部書いていく

好きと嫌いのノート

自分を綴ったり

グリーン賞 写真

能代市 佐藤 叶実

今と違う土地で

今と違う人たちと

今と違うことをしているとき

思いつきで

アルバムを遡る

そして「今」の写真を見て

そのときの

空気を

匂いを

味を

声を

感情を

少しでも思い出して

感じる事ができたなら

それは

とってもステキなことだと思っから

母は

ムダな写真ばかりと言うけれど

私は

決してムダではないと思う

例えば

私が大人になって

私は今日も写真を撮る
パシヤリ

グリーン賞 新しい自分

自分のイメージを打破しよう
自分が生まれ変わるために

能代市 清水 虹海

真新しい

キャンバスに

絵を描くように

色をつけるように

私も新しくなりたい

髪を明るく染めて

派手な服を着て

イヤリングを付けて

街に出るんだ

友達をたくさん作って

彼氏とかも作って

家族を作って

そんな自分を夢見てる

でも夢見てるだけじゃ変えられない

実行しなきゃ意味がない

願うだけじゃ変わらない

自分から行動しなければ何も変わらない

自分から話しかけてみよう

自分から行動してみよう

グリーン賞 御盆

秋田市 八木 京

蝉の声と風鈴の音が
橙々色の空の下
確かに重なった

線香の香りたつ

写真のない仏壇に

手を合わせる

幼い頃に母から教わった

天使になった兄の事

兄を腕に抱いた時

羽のように軽かった事

私が産声を上げた時

兄を追い越した事

十七回目の夏

私は天使の残骸を見た

両手に収まる桐の箱

顔も知らない兄はその中

静かに眠っていた

「はじめまして」

盆の夕暮れ

短
歌

短歌

最優秀賞 秋田城趾

秋田市 長 澤 妙 子

土取りの穴より出でし和歌木簡 万葉仮名にて波流の恋歌
「波流奈礼波」官使の恋の木簡はねむりつづけて千二百年
袍衣壺の底に萬年通宝五まい埋めし親御の祈り遙かに
科学もて千二百年を緋けば血液B型その子は男子
形代や齋串の類のまじない有り コロナ祓いを願いたき今夏
かつて子のスキー遊びのこの岡は天平びとのお祓いの沼
暑かった 発掘現場の見学会うね重なりし瓦見た夏

奨励賞 津 軽

北秋田市 加賀谷 育

津軽から秋田へ嫁して日を重ねダイヤモンドの婚を祝いぬ
父母眠る津軽に聳える岩木山裾野を広げわれを迎える
見覚えのある古き文字目に入りぬ看板業の兄すでに亡し
立佞武多の囃子と共に街を行く見上げ見上げて後に続きぬ
鯛の香津軽鉄道に偲びつつ太宰治の里に憩いぬ
両の手に小皿カチカチ打ち鳴らす亡父の得意の津軽手踊り
津軽の血いっばいもらい生きて来た訛りは残る「じよっぱり」の気も

奨励賞 花の風

由利本荘市 熊 谷 すが子

父と竹つ花嫁の背にやはらかきステンドグラスの光彩が差す
新郎へ娘を託す任終へし夫が漏らすかすかな吐息
ぎこちなき牧師の声に芯ありてマスクを通し堂にひびかふ
きざしを降る二人に花の風白きヴェールが空にたゆたふ
コロナ禍に家ごもる日日あひ寄れる人あることの安らぎおもふ
当世のかたちあるらし若きらにわが良妻像あへて語らず
六月の薔薇咲く庭を行く二人われの知らざる明日を歩む

奨励賞 夏の大地から

秋田市 森 野 奈 津

揚げ茄子のからむ醤油に誘われて釜の白飯売れ行き早し
蛇腹なる切れ込み入れて塩ずりを成せば胡瓜の歯におもしろき
素麺の細さの似合う暑き日に冷房入れず窓を開けおり
赤く張るほっぺのごとし熟れトマトぬるきまま食む味わいの濃し
木下闇 裏窓過る黒蝶を幻視のごとく見失いたり
草引きて三枚拾う蟬の羽根 私は羽根を何処に落とせし
この汗は私を通り抜けて行く 地と太陽の引力のまま

入選 夏の午後

秋田市 石田 幸栄

境内の木陰に憩ふ夏の午後梢越しに見る真青なる空
ストローを指に絡めて炭酸の泡の弾けるまでを見てあつ
七月の白きビーチに西瓜割り割り切れぬもの裡に抱へて
思慕を絶つために髪切る夏の午後鏡の傍に咲く水中花
カッコウの声は水輪となり遙か向かうの空へ広がる真昼
風に水脈あるやうに葉の揺れながら夏の光はプリズム描く
あぢさゐの色おとろへて夕暮れの晩夏の小径ひぐらしの鳴く

入選 参拝

鹿角市 金 万 和

敷石は釈迦像までのアプローチ心は既に合掌整う
山門は背負い来し荷の荷扱い所本堂までの足どりは軽く
阿吽の像睨みを効かし門に居て阿形の口は誰を呑み込む
思いあぐね訪い行けば苔庭に日の差す参道今は眩しく
夫として憂える軌跡の鎮まるを願いて朝の山門潜る
天仰ぐ杉の木立は錫杖の如く気強く境内に生く
仏像に向き合う夫と片言の経本読みて道標問う

入選 日暈の下に

秋田市 小松 芽

まひるまの老健施設をつつみたる日暈の下に母の余命きく
耳元に母の好みの七種の秋咲く花を指折りていふ
ゆふぐれの窓に葉擦れの風が鳴る「フルートがきこえてゐる」と母は
二番目の沢水欲しと母がいふ介護士さんは真剣にきく
ぼつかりと埴輪のやうにひらきたる口より去りぬ母のたましひ
安らげきわがははその死を嘉し涙ぐみたり看護師長は
見送りの介護士たちのめぐりのみ明りの照りて霊柩車発つ

入選 山の径

潟上市 瀬 下 京 子

退院のあすを待ちわび陽のにはひ残れる夫の夜具をととのふ
三たびなる入院のりこへ山頂をめざすふたりの春山の径
春山の根開らき見つめ吹き上げる噴水のごと歩を進む夫
つよがりを言ふ夫なれど腕にみる副作用痕そよるなでやる
帰宅して登山の疲れの気がかりも目覚むる今朝のひかり明るし
あす登る山の天候はれもやう星影かぞへて薬をそろふ
万華鏡まはしみるごと山頂の涼風夫の百薬ならむ

入選 子吉川の岸边

由利本荘市 佐藤 榮悦

川岸に動くともなき白鷺の待ちいる姿わが身にかよう
瀬音たて流るる水は石に反れわが過ぎゆきを見せんとする
童の日通い泳ぎし瀬のあたり人影もなく築場は見ゆる
川岸の葉に鎮座する青蛙わが会わざれば誰と目が会う
平なる小石に波切り競いたるはるかな童の歓声頭ちぬ
海近き水面に映えし打上げの花火はコロナに映像なると
手ぬぐいにメダカすくいし浅瀬今草原となる歲月はるか

入選 球児たち

秋田市 山田 愁眠

ホームラン打ちし球児の突き上げる拳の果ての青空深し
思いきりジャンプし白球を逸らしたる球児の片腕、青春そこに
内野手のエラー続きてキャッチャーは投手へ歩むマスクを取りて
ピッチャーの決意の固き直球を受けしキャッチャーしばし動かず
転々とフェンスへ走る白球が選手生活に句読点打つ
土壇場のエラーには触れず球児らは笑顔で語る「力尽くした」
甲子園なき戦いに勝利して誉の校歌をうたうは今ぞ

入選 道の駅

由利本荘市 土谷 敏雄

地吹雪をつきぬけ車現れて雪をどざりと土産のごとく
イベントに海鮮市のひらかれて生きてる蟹がよきによき招く
早蕨をきれいに束ね市女らはレシピ説くとき秋田訛で
物産展銘酒に銘菓漬物ととりわけいぶりがつこメーンに
緊張の続くいつとき和みけり駅の生垣合歓の花咲く
道の駅はるかに望むジオパーク飛島のあり鳥海山のあり
休息を終へし自動車駅を発つ挙手の礼してゆるりと発車

グリーン賞 夏薫る

秋田市 豊 葦 穂

夜明け前群青色を背景に向日葵そつと太陽を待つ
自転車をこいで吹く風心地良く額の汗が頬を流れる
簪を刺すため伸ばした髪を切るお祭りのない特別な夏
指先で水平線をなぞっても地球の丸さまだわからない
お転婆な少女の白いワンピースどろんこ遊びでもう台無しね
夕暮れに変わり続ける空の色たまには立ち止まって見ようか
星屑の光に照らされ伸びる影まだ涼やかな新月の今日

俳
句

俳句

最優秀賞 米作り

大瀧村 池田 郷太郎

干拓の大地生き生き種を蒔く
代掻きし田の面に生氣満ち溢る
太陽と早起き競ふ田植どき
干拓の大地にそよぐ青田風
太陽の恵みズシリと稲穂波
稲を刈る八十八手の総仕上げ
大いなる明日を夢みる刈田道

奨励賞 山陰の村

由利本荘市 佐々木 成

山陰に六戸の村や雉子高音
うぐひすの声澄み渡る谷間かな
山守の裔の六戸や山を焼く
焼く山に村の長老切火打つ
山焼の太初の火色猛り立つ
山焼の了へたる村や星明り
父祖よりの山を余さず蕨生ふ

奨励賞 廃鉱の跡

由利本荘市 土谷 敏雄

廃坑の口黒ぐると山ねむる
採鉱の痕より雪解始まり
廃鉱の今に残りし春祭
寄進者に鉱山の名残る幟かな
社宅跡桐三代目花盛り
選鉱の女工の歌か蝉時雨
カドミウム除染せし田や稲たわわ

奨励賞 羽後抒情

能代市 岸部 吟遊

日輪のまだ濡れてゐる路の臺
草餅や語尾にこの付く羽後言葉
まなざしの直ぐな少年青林檎
あをあをとほてりの残る盆の道
ひとさしゆび天地を指す盆踊
萩こぼるひとすぢ続く塩の道
小鳥来る結びに繋がる母郷かな

入選 夏書

秋田市 松井 憲一

母愛でし端溪硯や夏に籠る
夏書とす王羲之の書に筆重ね
郭公の声のみけふの夏書の間
亡き母に吾が名呼ばるる夏書かな
母想ふ夏書の筆や禿びてなほ
仏万来西方浄土如夏書
いつしかに色無き風や経納む

入選 乳癌

鹿角市 沢田欣之

告知され唇かみにけり妻の冬
慟哭か葛藤の尾か虎落笛
乳癌ぞ乳房全摘雪しまく
オベ終への異界見し眼や冬ざる
乳房^な失き妻となりけり冬銀河
嗚咽漏る幾夜か数へ冬終はる
諦観の眉の清しさ春隣

入選 快復祈願

秋田市 秋野護

激痛に神をも呪ふ熱帯夜
目覚めたる救急ベッド脂汗
病原のつかめぬ画像野分雲
繰り返すブロック注射片時雨
転院に求めし光寒の水
同病を経たる医師なり春の雲
リハビリに快復の夢風薫る

入選 潟の周辺

秋田市 七尾理絵子

青蘆の女潟光の男潟かな
青蘆の芯細きこと直きこと
鳥影や原初のごとく蘆茂る
その色の蜻蛉生まれぬ男潟より
夏の日や農学校のチャイム鳴る
敷地には準優勝の石碑夏
鳩崎の藪蚊に刺され戻りけり

入選 合歓の花

にかほ市 宮本秀峰

禅院の静寂に合歓の花明かり
廃校に子らの面影合歓咲けり
花合歓や沖ゆく白き旅客船
曲屋に木馬嘶く合歓の風
閑けさや微睡み誘ふ合歓の花
合歓咲くや雨に蕉翁偃びをり
老いてなほ淡きときめき合歓匂ふ

入選 白神抄

能代市 塚本佐市

鳥帰る白神晴の浮力得て
弾み来る白神川瀬稚魚放つ
雪形は駒農を継ぐ意を決す
熊除け鈴忘れず腰に山開き
びしょ濡れの櫛の一幹梅雨に入る
蕎麦咲きて朝の白神雲隠れ
白神嶺背に海へ向く墓洗ふ

入選 母

横手市 阿部清流子

独活届くひらがな並ぶ母の文
日雇ひの母汗拭ふ夕厨
梅酒澄む浮かぶ一個に母の顔
背を丸め夜なべの母や野良着縫ふ
貧しさに咽びし母や藁塚^はの陰
酔ふ父を宥める母や吹雪の夜
母在すごと灯りたる雪のまど

入選 風

湯上市 藤 田 幸 子

花嫁のブーケ踊るや春の風
ふらここの胎児あやしてゐることし
投函の頭上かすめて初燕
谷川に垂るる山藤いつも揺れ
蓮の花風の高さに咲きにけり
風音や隙間だらけの冬木立
風音の乾いてゐたる寒日和

入選 田植

大湯村 田 村 陽 子

伝説の湖底は沃土田を植うる
田植笠歳を刻みし赤い紐
田を植うる指の先まで母似かな
早乙女の助っ人ポニーテール揺れ
体験の田植歓声風にのる
早苗植う此の地この土いとほしき
植えし田に満たす命の水奏で

入選 青胡桃

横手市 小 國 弘 二

風に風乗せて梢や青胡桃
青胡桃散乱鳥獣保護区なり
青胡桃杉皮屋根に丸い石
青胡桃使はず朽ちし外厠
昼月はいつも色白青胡桃
青胡桃成瀬水力発電所
青胡桃ここに尽きたる羽後の径

入選 天高し

にかほ市 齋 藤 みどり

夏休み樹よりも大きキリン描く
昼寝覚め主婦の素顔に戻りけり
躓きて傾ぐ鳥海山天高し
廃校にまだあるバス停梅擬
愛犬の名も連ねたる賀状かな
裸木や弁解言ひ訳言はぬ人
冬ざれや「ただいま」と言ひ「カレー」と問ふ

入選 田の整理

北秋田市 小 塚 宅右衛門

わが田撮る遺影のやうに浅き春
朝霞重機ゴトゴト土砂はこぶ
父祖の土息あげ盛られ夏の雨
どつしりと森吉見えて青田風
田を均しむらは明るき蕎麦の花
秋冷や集ひ無口に換地地図
換地済み父祖の田あたり冬の月

グリーン賞 昔日

秋田市 板 橋 魁 生

ランドセル駆けて駄菓子屋蟬時雨
口開けて座って譲らぬ扇風機
仕事する大きな的に雪の玉
また明日言えた青春名残り雪
今はなき潮の香りの揚花火
黒い幕閉めて裏の文化祭
幼年の聖夜の奇跡夢心地

川

柳

川柳

最優秀賞 揺れる想い

五城目町 佐藤 ちずる

花の頃埋めた記憶が動き出す
向き合って心はいつも擦れ違い
淋しくて紅を引いてる梅雨最中
嫋やかに揺れる女の恋ごころ
投げかけた言葉の重さ月欠ける
燃え残る台詞ひとつを胸に抱く
わが底の花ひとひらにある追慕

奨励賞 風の言葉

秋田市 菅原 浩洋

カラフルに生きてみようか一ページ
赤をつけ紫きても人を恋う
人間が好きで一緒によく転ぶ
夕暮れのわたしの恥部を陽が照らす
安らぎの風の言葉に乗るわたし
夢ひとつ座った椅子が揺れている
ちちははと同じ定め舟にのる

奨励賞 日日新た

大仙市 佐藤 啓子

求婚を待っていそうなロゼワイン
愛一途直滑降の日もあれば
幸せにウインク愚痴にクラクション
胎動へ君のページを抱き寄せる
もみじ手に何を残そう花の種類
日日新たやさしい風に生かされて
信じ合う比翼の旅は終わらない

奨励賞 薔薇の唇

由利本荘市 澤田 幸代

縁側があれば尚いい終の家
身の丈をこえた望みか不意の雨
ひとり居の女の鎖骨風の途
遅咲きの花に合わせる深呼吸
薔薇のよな唇からの変化球
変化球リボン結びの蝶になる
いわし雲地にコスモスの現在地

入選 こころ

秋田市 佐藤 明子

色褪せた文庫本手に夜もすがら
漱石のこころ葉が忙しない
酔うほどに歌は詩人をつれてくる
欲捨てた心一番強い時
写経する無の字に心入れながら
減っていく花瓶の水にみた命
夢は未だこの世の出口通過する

入選 幸せタイム

秋田市 三浦千両

微笑みを交わすカガミと私と
通リゃんせ戸口は少し開けておく
退屈はしないメル友若干名
騙されていましょう愉しげなうわさ
ワルツ踏む月影さしてくる窓辺
草の花健気に咲いていた出会い
風向きも雲の形もお友だち

入選 春の目覚め

五城目町 加藤円心

甘言で撫でると籠が緩み出す
脈のある話だお辞儀深くなる
手は打った後は明日の風任せ
雲行きに休憩挟む年の功
居るだけで良いと無理矢理担がれる
波長合い一会の華となるルンバ
さあ春だ父の一途が目覚めます

入選 輪の中に

秋田市 藤原ぎてん

皆笑顔私も入れて輪の中に
世代越え手を携えて虹を見る
楽しみがあると信じて歩んでる
子等夢中自粛解かれた遊園地
迷路から導き照らす星あかり
変わらずに自然と地藏古里景色
老若男女和気あいあいのボランティア

入選 道

五城目町 細田陽炎

青い辞書抱いて明日へ迷わない
奔放な夢が駆け出すクレヨン画
旅発って母の翼は濡れている
骨太の父の背にある子の未来
懸命に男が賭ける道がある
幸福を掴む両手を陽にかざす
寄り添って心に満ちる大落暉

エ
ツ
セ
イ

エッセイ

最優秀賞 ゆずり葉と

おしゃべり男

東京都昭島市（東成瀬村出身）

佐藤 清 助

コロナ禍の最中、生あるものの宿命とはいえ、私の親族が次々に他界した。郷里の実姉（86歳）とその夫（92歳）、実妹の夫（84歳）、そして東京在住の義母（104歳）である。それぞれ、天寿を全うしたとは言え、心に穴があき実に寂しいものである。

義母の死亡に伴う様々な手続きの中で、私は妻に代わってその一部を代行した。その手続き中、数年前に遭遇した「稀有な名字」に再び遭遇した。その奇遇さに驚きの声を上げそうになった。

私は、数年前まで五十年にわたり受験関係の仕事が続けてきた。

当然なことではあるが、私の五体は、年を経

る毎に陽の輝きを失い辞職直前には、その残照さえ尽きる寸前になっていた。当時の私の体力では、受験生の期待に十分に応えられないという弱気が脳に充満していた。若い後継者に道を譲るか否かの決断を迫られていた。

それでも私は、現状に抗い、体力の復活を維持になることに一縷の望みを託して、眠い眼をこすり、朝の僅かの時間を活用し、多様なコースを設定し散歩を続けていた。そんな晩秋の日、生涯で一度たりともお目にかかったことがない「名字」に遭遇した。

大谷石の門扉に埋め込まれていた「杠」という字の表札だった。後で調べればわかる事ではあるが、何と読む字であるか知りたくてたまらなくなった。ちょうどその時、かの隣家から、年配の女の人が出てきて落ち葉の掃除を始めた。

私は、内心「しめた」と思った。

私は、連れである妻から、常に「おしゃべり男」と揶揄されている。しかし、今まで歩き、切り開いてきた自分の世界では、これだけの疑問を放置して散歩を続行するわけにはいかない。

妻が止めるのも聞かず、年配の女の人に丁寧

な口調で質問を発した。女の人も、おしゃべり好きと見えて喜んで自分の知識を披瀝するように教えてくれた。

「ああ、お隣さんね。読めませんよね、この字は。『ゆ・ず・り・は』と読むのです。九州の佐賀にある名字だそうです。本当に珍しい名字ですよね」

それから間もなくの事。仕事が終わりに帰途についている電車内はかなり混んでいた。すると、私の前に座っていた三十歳前後の実に澆刺としたサラリーマン風の青年が、私の歳や疲れ具合を素早く読み取ったに違いない。スツと立ち「どうぞ」と私に席を譲ってくれたのである。私は、初めてのことなので、思わずドギマギしてしまった。自分では、人前では毅然としていたつもりではあったが、それは飽きまでも「つもり」という主観的な思い込みに過ぎなかったのだろう。繕ってみても、体力の綻びは隠せるものではない。客観的には疲れ果てた老人そのものだったに違いない。それなりのシヨックを受けたが青年の好意に甘え座席に座り、しばし目をつむった。すると、座席を譲ってくれた青年の事、儂く霧散した自分の若さの事、もう潮時かなという気持ちが一瞬時に浮かび

消えていった。その時、散歩で学んだ「杠」の知識のせいか、急に故郷の中学校の国語教科書に載っていた「ゆずり葉」という詩が思い出されてきた。

「ゆずり葉」

河井醉茗^{かわいすいめい} 作

子供たちよ これはゆずり葉の木です

このゆずり葉は 新しい葉が来ると 入れ代って古い葉が落ちてしまうのです こんなに厚い葉 こんなに大きい葉でも新しい葉が来ると無造作に落ちる 新しい葉に命をゆずって……

目を開けてみた。青年は、背筋を伸ばしつり革につかまり立っていた。しばらくして青年の前席が空いたので、青年は座った。

ところが、何ということか。次の停車駅から、私と、ほぼ同年代と思われる老人が乗車し、座ったばかりの青年の前に立ったのである。私が予想した通り青年は、又もやサッと立ちその老人に席を譲ったのである。青年も精一杯働き疲れているだろうに。気の毒に思えた。青年の行為は「僕は善人だ」という気負いは全く感じられず、極めて自然体だった。乗換駅で降りる時、私はその青年に

「貴方は実に立派な青年です。貴方のような人

物がいる限り日本は大丈夫ですよ。ほんとうに、ありがとうございました」

と、自然に大仰な言葉が飛び出し、深々と頭を下げお礼を言った。

青年は、快活な表情で声を出して笑い

「どういたしまして、お気をつけて」

疲れてはいたが、私の心は、とても満たされていた。

「ゆずり葉」の木は暖地性の常緑樹である。この「ゆずり葉」の木は、新しい葉芽が出て、次第に大きくなり肉厚の艶のある大きな葉に生長してくると、古い葉がポトリと落ち新しい葉に「生」を譲るのである。「ゆずり葉」の作者河井醉茗は、老人から若者へ、親から子へと引き継がれて行く「世の仕組み」を、次代を担う新しい葉である若者や子供たちにこの詩を通して諭したのであろう。

私は、新型コロナウイルスという世界の感染史に記されるであろう魔物が猛威を振るう中、義母の死亡に関する手続きを進めていた。

そんな中で、仕事盛りの担当係員は私に名刺を差し出し、義母の長寿を褒めた。名刺を見た私は、驚いてしまった。何しろ、数年前の散歩

中に遭遇した「杠」という名字に再び遭遇したからだった。名刺には「杠 ○○」と印字されてあった。私は、すかさず「ゆずりはさんですね」さらに追い打ちをかけるように「佐賀の鍋島藩の御出身ではありませんか」

散歩中に遭遇した「杠」さんとは別人ではあったが、担当係員はマスク越しに笑い、半ば呆れかえっているようだった。

「佐藤さんも、佐賀県ですか」「いや、私は秋田の県南出身です」

こんな、やり取りの中で「……やはり、私はおしゃべり男か」という思いが駆け巡った。しかし、こんなおしゃべりが、功を奏したのか、煩雑で困難な手続きも思いのほか順調に行きそうで、ほっとした。それとともに、「ゆずり葉」に象徴される宿命的な「生」や「世の仕組み」を再認識させられた日でもあった。

奨励賞 平気で生きている

秋田市 岸 部 ハマ子

令和になって初めての冬は「記録的な暖冬」と連日放送されていた。

それが、二月五日から十二日までは真冬日となり、大雪注意報が出た。この一週間の出来事が今だに真実のことだったかどうか。

二月五日の昼、弘前に住む兄から電話がきた。「姉のようすがおかしい、すぐ来てくれ」と。私は午後の特急に乗った。雪は強く降り出していた。

弘前駅で兄と一緒に姉の住むマンションに行った。鍵はあるがドアチェーンがかかっている。緊急通報番号へ電話した。消防車と警察車三台が数分できた。

消防署員がマンションのドアチェーンを切り、姉の部屋のドアを開けた瞬間、警察官が私の前にさっと立ちふさがり「入室禁止です」という。

なぜなのか次々と警察官三人が同じ質問をする。「氏名、生年月日、住所、誰からの通報で

何時に何を利用してここへ来たか、姉と最後に会った日、その時の様子は？」だんだん答えが不安定になる。

兄への質問は不気味である。

兄は一月二十七日に姉の買物の手伝いにマンションへ来た。

「あなたは本当に二十七日に来たか。二十七日でないのか。杖が転倒した身体の横にあるのはおかしい」と何度もきく。

推定で姉は二十八日朝、玄関へ新聞を取りに行った、灯油缶が廊下に斜めに飛び出ている。それにつまずいて転倒した、らしい。

三時間後、「本人確認お願いします」と警察官に促された。何かに幾重にもくるまれた姉はとてもきれいな顔だった。ああ、きれいでよかったとほっとした。

「遺体は明日お返しします」と警察官に姉は運ばれて行った。

翌日「レントゲン検査の結果、重大なことが出てきたので解剖になります」と電話がきた。

私はいったん秋田へ帰った。

八日、警察署から「出頭せよ」という電話があり兄が出頭した。

死因は転倒、第五肋骨が折れて肺を突き刺し

た。一瞬のことでこの人は即死した、との医師の所見である。

自分の身辺におこるとは思ったこともないことだった。

だが、まず目前のことをしなければならぬ。

九日朝、弘前行の特急に乗った。北に向かうにつれて激しい吹雪である。大鰐駅で列車は止まった。「脱線の怖れがあります、バスに乗り変えて下さい」と車内放送があり私は列車からおろされた。バスは一時間後にきた。

急な大雪の中、弘前へ着いたのはもう午後二時を過ぎていた。

雪にまで私は責められているのだろうか。

昨年十二月末、私は姉の買物を手伝うため弘前へ行った。「これから雪で私は三月まで弘前へこれられない。冬の間は兄に寄ってもらうようにする、あなたが心配だ」

姉は笑った。「私は母親似だから最低でも九十六歳までは生きるよ、何かとすぐ病院に行くお前のような精神がやわではない。心配いらないよ」私の悪口を言っただけで楽しそうだ。

「九十六歳まであなたの手伝いは無理、私の方が先に逝かしてもらう」私より七歳上の姉は

百歳まで生きそうな心配がする。この冬も難なくのりきれると安心した。

転倒して死亡。納得した死というものはあり得ないのだが、これは私の思慮の外である。

葬儀の終った翌日、姉の部屋へ入った。

壁一面を占める膨大な書籍、仏面、仏像、観葉植物。家の全ての物が息を止めていた。中学校の教師だった姉の人生を豊かにしてくれた、好きで集めたものたちである。だが、私は持つては行けない。せめてもと北村西望の観音像一体と『地獄絵』一冊だけ持った。あとは処分業者にたのむ。高価な本をあきらめきれなかったが「死」とはこういうことなのだと自分にいいきかせる。

十二日、秋田へ帰る普通列車に乗った。混んではないが落ちつかない。真向いの窓の外を眺めた。澄んだ真っ青な晴天だ。雪原が続く。

広い景色が次々と変わってゆく。

景色の中に一本の黒い直線が入ってきた。その線が高くなったり雪原すれすれになったり二本に別れ一本につながり弧を描く。ああ渡り鳥だと気がついた。それはなわとびをまわしているように見える。

ほうらほら 青山の白うさぎ どんすけ

どん 一発車 二発車 三発車 一逃げろ 二逃げろ 三逃げろ ほうらほら

なんと薄情な妹なのだ。あの涙は嘘なのか。空を飛ぶ渡り鳥を見ながら声は出さずになわとび歌を歌う。なんと不謹慎な。だが幼い日、姉が歌って教えた歌だろう。姉と私は幼い頃の歌を一緒に歌うのをよく楽しんだ。

姉は私をおんぶして小学校へ通ったそうだ。「ハマコはおとなしいから」と母は姉に背負わせた。姉は「とてもいやだった、だからあなたが今度は私のめんどろをみるのは当然だ」と話していた。

だが、いつの頃からか姉のめんどろをみなければいけませんのでどうぞそれまで私を生かして下さい、と祈ってきた。それはもしかしたら私の生れてきた「用事」なのかもしれない。その「用事」が不本意に終わった。いや「死」に不本意も本意もない。生まれると同時に確定されているものを受け入れるしかないのだ。だが今その逝き方が悲しい。

何かの本で読んだ正岡子規のことはがある。

「『悟り』とはいかなる場合も平気で死ぬ事かと思っただが、これはまちがいで『悟り』ということはいかなる場合も平気で生きている、と

いうことだ」

姉の死を思うと頭が空白になる。私は全く「悟り」とは関係ないが、平気そうに生きている。

奨励賞 お地藏様のお祭りとおアゲメダレ

大仙市 小松 紀子

農家に嫁いで四十年、出羽山地の麓に開けた小さな集落で、緑豊かな自然の明け暮れに身をゆだねている。

戸数僅かに十三軒の家々を繋ぐ狭い道の三叉路の端に、間口奥行き共に一メートルほどの鄙びた地藏堂がある。祀られているお地藏様は二十数体。この地で生を受けながら、長ずること能わずに彼岸に呼ばれた幼子たちの化身であろう。

亡き子の菩提を弔うために、石屋に依頼して我が子に見立てた石地藏を作り、菩提寺の住職に魂入れをもらったのだと、亡き姑から聞いていた。肉体は天空に休むことになっても、魂は生家の元に時々帰っておいでとの願いも込めたかもしれない。

親の胸から引き離された子供同士が、肩を寄せて励まし合いながら、往来の人々を温かい眼差しで見守っている。

特に弱い者たち、子供や老人には、転ばないように、交通事故に遭わないようにと、皆でまじないをかけているかのようだ。半眼、困惑のような眼差し、説教しそうな口元など其々に表情が違って、眺めて飽きない。

先人が、集落の入り口に近い道端に地藏堂を作ったのは、疫病や災いが村に入るのを防ぎたいという祈りがあった。さらに、道行く人を守護しつつ道案内をするという、道祖神信仰とも結びつく。

— 大事なお地藏様に感謝報恩の誠を捧げるために、わが集落では、地藏盆の宵宮に当たる七月二十三日にお地藏様のお祭りを催している。

— 当日は午前八時に住民（主に中高年のかあさんがた）が三々五々集って、お堂内外の掃除、幕の張り替え、蠟燭立やおりん、花瓶など備品の手入れに精を出す。

— その傍ら、お地藏様を一体ずつ盥に入れて水で優しく洗い清めるのだが、あたかも産湯か行水のお世話のようだ。新しいタオルでお顔を清拭し、新調の前垂れ「アゲメダレ」を着せる。

— これは涎掛けとか、前掛けとか、かあさんがたは好きなように言うし、色も赤に拘ってはいない。

— 毎年このことなので、どのお地藏様が自分の家のご出家なのか、かあさんがたはよく把握している。百年も前のお人かもしれない古いご先祖のお地藏様を、よく見分けるものだと感心する。おそらく、家々で代替わりをしながらも引き継いできたのだろう。

— 私の家のお地藏様は一体で、俗名は「昭、あきら」ちゃん。生後十日であの世に召されたという。「首の辺りが大きく腫れて、高い熱が出て……」と親類の人から聞いた。

— とうの昔のことである。若い両親が長男を失った嘆きが、それが昭和二十二年という昔のことでも、容易に想像できて胸苦しい。母親が我が子を失うという逆縁や、人並みの寿命を得られなかった早世の子の不幸。母子のあわれが、昭ちゃんと母の悲しみが、胸にじんわりと沁みてくる。

— その三年後、男の子が生まれて元気に育ち、ご縁を得た私がここで暮らしている。

— 昭ちゃんの母親である私の姑は卒寿の生をまっとうし、七年前に泉下の客となった。毎年の地藏盆に合わせて昭ちゃんの前垂れを縫っていた。「アゲメダレ」といいながら、何か家にある端切れを利用していたので、赤い布とは限

らなかった。赤色は、病や邪を除く色だと、日本では信じられていたらしいが、義母の言葉からは、新しい、という意味も感じられた。最晩年に、「アゲメダレ、頼むな」と、ポツリと口にした。

例年ならば、朝のお掃除を終えたら、いったん解散して、改めて午後の五時半に集合。子供が喜びそうなお精進のご馳走をお供えし、花と灯明、香を手向け、和尚様の読経を心静かに聴く。

それから、共食。お地藏様とご住職と皆でいただくために、お堂の前に奠座を敷いて車座になる。一人一品持ち寄った手づくりの赤飯、煮物、漬け物、寒天などのご馳走を食べながら、あれこれとお喋りする時間は、集落の絆を感じる時間でもある。

しかし、今年は違った。世界中を襲ったCOVID19感染症の拡大を防ぐために、各地であらゆる手立てを講じている。私たちも、集まっでの飲食や会話は避けよう、と意見が一致し、夕方の集まりは中止とした。お参りは、其々の時間に、其々が行うことに決めた。

夕刻、私は夫と二人で出向き、アゲメダレのお地藏様にお供物を手向けて合掌した。

昭ちゃん……昭兄さん、存命ならば、七十三歳かな。きつと味のあるお顔をした働き者で、深い懐をお持ちだろう。

お母さん、そちらで昭ちゃんにお会いできましたか。

お地藏様のお祭りを終えて八月は、新聞やテレビが広島長崎の原爆や土崎空襲の惨劇を一斉に伝え、盂蘭盆会の季節となる。古里や先祖を大切に思う文化が日本人の心をやさしくする。

本来の地藏盆は子供の幸せな成長を願う子供中心の行事だというが、お地藏様はすべての人を救い、見守っているに違いない。住民で力を合わせて、お地藏様のお祭りを、大切な行事として続けていきたい。

地藏堂の前を通るとき、見守りありがとう、と思いながら、昭ちゃんを目で探す。私が縫ったアゲメダレがよく似合っている。

奨励賞 雑木林の道の歌

横手市 春野 昌和

九十歳を前に他界した母の生家の近くに二つの国指定文化財がある。典雅な巫女舞の重要無形民俗文化財の保呂羽山波宇志別神社霜月神楽と、室町時代の重厚な建造物の重要文化財の保呂羽山波宇志別神社神楽殿である。

保呂羽山（四三八M）は横手市大森町八沢木と由利本荘市大内町との境の出羽丘陵に聳える山岳信仰の山で、山頂近くに二つの文化財の由緒ある本殿としての格式高い波宇志別神社が建っている。二つの文化財の在所からも母の生家からもその山は見えないのだ。里山に囲まれているためである。

ここ数年来、私はそれら二つの文化財の例祭日に保呂羽山に登り続けてきた。五月八日の神楽殿の例祭の終わった午後からと、十一月七日夜から八日朝にかけての霜月神楽のその七日の日中である。

母は横手盆地の中央部の現在の私の住む家に嫁ぐ前に、保呂羽山の本殿神社に参拝しようと

登ったことがあったそうだが、当時は保呂羽山は女人禁制で、途中の遙拝場の下居堂おきいで引き返したそうだ。本殿に参拝するための表参道が唯一の登山道で、母もその道を生家から歩いたのだった。現在は下居堂の近くまで車が入る。そのため、表参道を歩く人はほとんど居ない。数年間歩いている私も、神社や山頂では登拝者と出会っても、表参道では誰一人とも出会ったことがなかった。しかし、登山道はよく整備されているのだった。

私がわざわざ表参道を歩くのは、勿論、母が娘時代に歩いたことへの追想である。私を産む前にこの山道を歩いたという女が神秘的で、そして、どうにも懐かしい。山は異界だと言う。山で遭難死した人を数日間搜索しても発見出来なかったのに、身内の者が搜索に参加したら三十分ほどで見えられたという事例もある。母の、娘時代の姿で山道を歩く幻影に私は無意識に導かれているのだろうか。

表参道の道中でもそんな異界を強く意識するのは、ナラやカエデの雑木林の中を通る時である。

今年（二〇二〇年）五月八日の正午前に私はその雑木林の道を歩いた。

今年の神楽殿の例祭は新型コロナ禍の感染防止のため中止した模様だ。いつもの年だと例祭の巫女舞や神事の様子を格子戸の外から眺めては、たまに宮司さんから、堂内に入って参拝するように導かれて玉串を捧げることもあった。その例祭の形跡が今年は全く無いのだった。

深閑とした神楽殿をあとに保呂羽山の登拝のため、私は表参道に向かった。暗い杉林を通り抜けると、陽光で明るいならかな雑木林の道になった。ナラやカエデなどの樹々は萌黄の盛りで、朱色も混じっている。この雑木林の道が他の数多の雑木林よりも感懐を私に醸してくれるのは、古代から歩かれた人々の憩いの道として想像するためののだろうか。

車道と合流し、再び山道に入ると間もなく下居堂に辿り着く。下居堂は何の飾りもない瀟洒な小堂で、知らず知らず賽銭を奉じてしまう親しみがある。一方、施錠されており、女人の悲哀を封じ込めた感じも否めない。母は娘時代にこの場所まで登ってきて、そして、来た道を戻ったのだった。

私は下居堂の背後の岩壁の鎖場を登って尾根に出た。尾根は頂上までブナとミズナラの林相で、山容は衝立状になり尾根の両側は断崖絶壁

となる。まさに修験道の山だ。

波宇志別神社に辿り着くと、私は無施錠の重い格子戸を開けて礼拝した。堂内にある登拝者記入帳を手にとった。それぞれの参拝者の日付と住所氏名や感想が書かれてある。

私も、コロナ渦を波宇志別の神様が静めてくれますように“と、日付と住所氏名と共に書いた。参拝したあと、頂上の三角点を踏んでから下居堂を見下ろす鎖場まで下山してきて、はっ、と気付いた。

私は登拝者記入帳に誤った当字を二箇所書いてしまったのだった。

何のはずみで気付いたのかは判らないが、神社まで登り返して訂正するなら、この場所を描いて無い。下は難所の鎖場だ。

しかし、一旦、意を決して山を降りた以上、再び登り返すには至難の意志が要る。道に迷った登山者が来た道を引き返すのが鉄則だが、その難儀にも似た心地だ。私のあとに来る登拝者の笑い種になること必定だが、まあ、一週間後に再び登拝して訂正すればいいか、とひとまずあきらめて下山を続けた。

表参道の雑木林に辿り着いた時、突如、脳裏にブラームスのヴァイオリン・ソナタ「雨の

歌」のメロディが浮んだ。韓国出身の女流ヴァイオリニストのジョン・キョンソフアが弾く。

結婚して母親になってから、鋭敏な演奏スタイルがふくらみと細やかな感情の表出に変化した、というFM解説で知って、CDを買って愛聴していた。この五月の明るい陽光の雑木林にはそぐわないメロディだ。

しかし、私はしとしと降る雨の日の情感の中で、小学生の頃を偲んでいた。

下校が遅いから、と母が学校に迎えに来た帰り道、鳥海山の北に長く続く低い出羽丘陵の上に三角帽子の形の山が秋の夕陽でシルエットで聳えていた。学校の登下校でいつも気にしており、父に山名を尋ねたこともあった。母と一緒に歩いて帰るふんわりとした気持で、甘えながら山名を尋ねた。

「ほろわさん。てっぺんまで登りたかったよ。お前を産むためにこっちへ来て、あの山は遠くなった」母は言っ、しばらく立ちどまって保呂羽山を眺めていたようだ。

時計は午後四時十分だった。五月は日が長い。私はこの雑木林から神社まで登り返して誤った当字を訂正することにした。“渦”は

“禍”に“静”は“鎮”に改め、当字に二本の棒線を引いて消した。

昔、母はどんな思いでこの雑木林の道を下ったか。夕暮れの中で私は思いを馳せた。

最優秀賞受賞のしとば

秋田城跡をめぐって

短歌部門 長澤 妙子

この度は思いがけない受賞の報を受け、身に余る光栄と嬉しさを噛み締めております。

自然の美しさや営み、日頃の小さな感動をコツコツ詠んできた私に短歌を続けるようにとのエールを頂いたものと感謝しております。

この夏の猛暑、先の見えないコロナ禍の中、ふと思いたって秋田城跡資料館を訪れました。

数年前移築された館内には出土品が整然と展示され、近年解明された漆紙文書や万葉仮名の和歌木簡には見とれるばかり。半世紀前、有志が社会科教師の引率で十キロ先のこの発掘現場で瓦溜りを見た記憶とも重なり、感激の一時でした。政庁との連絡橋整備も進行中。今後も遺構めぐりや歌を詠んだり精進して参りたいと思います。ありがとうございます。

傘寿のご褒美

俳句部門 池田 郷太郎

俳句作りを始めてから二十五年が過ぎました。始めた頃は意欲満々で、毎週新聞二紙に欠かさず投句を続けていました。

でも今はすっかり怠け者になってしまい、最近には月に二十句位しか作っていません。

それでも秋田の文芸には毎年応募を続けております。今回幸運にも最優秀賞を頂き、大きな賞に感激すると共に、選に当りました諸先生の皆様に心よりお礼申し上げます。

私は来年満八十歳の大台になります。

何時まで俳句作りを続けられるか少し不安もあります。今回の受賞を機にすっかり怠け者になってしまった俳句作りを見直します。

若い日のように出来ませんが、歳相応の句作りに励むつもりです。

夢の色

川柳部門 佐藤 ちずる

秋空の下、思いがけない「最優秀賞」の知らせを受け驚きと喜び嬉しさが交错しています。

春になると一気に季節が動き出し毎年その春から始まり一年の早さに驚き、過ぎて来た季節そして又喜怒哀楽に思いを馳せながら続けてきた川柳は十八年になりました。川柳は心情「胸の底から曝け出せ」と言われますが中々曝け出せずマンネリ化した句風に歯痒い思いです。諸先輩方、仲間の句に憧れますがまたその反面素直、単純自分らしさも大事なことだと信じ悔いする事なく心はいつも新しい一ページを作りたいと自分色の川柳に夢を掲げて頑張りたいと思えます。

最後に推薦して下さいました選者の先生方から深く感謝申し上げます。ありがとうございます。

心の支えだった故郷

エッセイ部門 佐藤 清助

故郷を離れてから、既に六十年も経つ。

私は自分の歩んできた道を、一般的には苦難の道ではあろうが、楽しく良い道だったと考えている。それは、家族は勿論ではあるが、堪らなく好きだった故郷の山河、村人の温かさ、母と実家、八人兄弟姉妹が無意識的に私の心の支えになっていたからだと思う。

思い起こせば、中学の国語の先生が私の作文を大いに褒めてくださり、社会科の先生が私を「社会科の神様」と称してくださったことを忘れることができない。私は、その後、受験界で社会科教師となり、受験の参考書まで出させてもらった。故郷の同級生が、私の文章好きを知って「あきたの文芸」への投稿を薦めてくれた。以来投稿を続け、奨励賞は受けてはいしたが、レベルが高く、諦めかけていた時の今回の受賞は、嬉しいの一語に尽きる。

小説・評論



応募の心得

渡辺 修

今回の応募作は前年と同じ十作品だった。受付順に短評するので参考にしてほしい。

①「秋田から南山閣を問う」―歌人にして国学者の落合直文を取り上げた評論。前年も応募された方だと思うが、指摘する点も前年と全く変わらない。どうか耳を傾けてほしい。

②「私の文を読むだけで、お金持ちになる方法。」―精神に障害を抱える主人公が成功を夢見る物語だ。読み始めて『アルジャーノンに花束を』を意識した構造かと期待したが、最後まで妄想の吐露に終わっている。残念だが作者の意図は汲み取れなかった。

③「あの人は、いま」―SF仕立てのラブストーリーには手垢のついたもので、これを「読ませる」には相当の力量が必要。作者の筆力不足は明らかである。焦らずに、まずは自然な会話の描写から始めよう。

④「よいち物語―貧困と愛」―昭和三十年前後の田舎の子どもたちの物語である。恐らく作者の少年時代の経験が反映されているのだろう、子どもたちの会話、行動、生活が実に生き生きとしている点は褒めたい。特に実質的な主人公である悪童「よいち」の描写は見事で、不思議な魅力を感じた。

ただ、物語自体は矛盾と説明不足だらけで破綻しており、評価できなかった。小説よりも随筆を読みたいと思った。

⑤「秋田千年の夢」―「創作スペクタクルタイムワープ民話」との副題がある。民話の体裁で、「だんぶり長者」や「三湖伝説」を下敷きとしているが、民話を逸脱する描写が多く中途半端なものになった。「良い夢をみた」という台詞の繰り返しはリズムカルで、思いのほかすいすいと読めた点は評価したい。

⑦「回想『水車の家』のおんちゃこ」―これが自伝小説だとしたら、作者の体験は素材として

非常に魅力的なものだ。力量がある書き手なら、かなり面白い小説が書けただろう。残念だがそうとはならなかった。誤字が多すぎるので、最低限の推敲はしてほしい。

⑧「母の声」―ある意味、実に「小説」らしい作品で面白くはあった。テレビのサスペンスドラマの脚本のような内容。ただ、あまりに欲張っているいろいろな要素を詰め込み過ぎている。母と娘の関係、出世に憑りつかれた男たちの争い、シングルマザーの主人公と愛人との葛藤など、盛りだくさん過ぎて何が「本筋」なのが見えなくなっている。

⑨「大文字の見える街から」―かなり書き馴れている人なのだろう、文章力は抜群で、時代の雰囲気を感じさせる描写は見事である。惜しむらくは主人公の存在感と芯になるストーリーが弱い。後半の失速が残念だった。

⑩「雨降りの夏」―子どもたちを主人公とした場合、彼らを自然に描写するのは難しい。本作は残念ながらそこを失敗していて、読むのが「痛い」。雨降りの時だけ逢える不思議な少女と少年の交流」という内容は、アニメなどでよくある話だ。

さて、応募作は十作だったが、⑥「百年前の修学旅行」だけは選考対象から外された。皮肉なことに事前の審査では、委員の三人ともが最高点を与えていた作品だった。

選考外となった理由は、多少表現を変えてはいるが、ある資料からの引用が明白な部分が複数あるのに、資料名を明記しなかったためである。これでは剽窃のそしりを受けても言い訳ができない。文学賞の選考では、絶対に通らないことを知って欲しい。

書き手に悪意のないことがはっきり伝わるだけに残念だ。これだけの作品を書ける作者の力量は本物である。どうか落ち込むことなく、今回のことを肝に銘じて次回作に取り組んでほしい。是非また読んでみたい。



大原 かおり

選考を終えて

読者を作品世界に引き込むには、読者の理解を邪魔せずに、その世界で繰り広げられる事件をスムーズに展開することが必要だ。ことは多

すぎず少なすぎず、いかに作者の意図した通りに作品世界を歩ませるかが腕の見せどころだ。

奨励賞の「大文字の見える街から」は、少女ゆりの目を通した世界の描き方にリアリティがあった。大人の会話に入ることが許されない子どもならではの理解の仕方に共感した。子どもが興味関心を抱かなかつたり、理解が及ばなかつたりすることについて必要以上に解説しない語り手のあり方は好感が持てた。

風土にちなんだ作品や自伝小説が多いのが、応募作品の特徴なのだろう。舞台となった地のことを知っていても知らなくても、その地に生きた人々の息づかいが伝わってくるのが魅力だ。地域や個人の来歴を知ることができるこれらの作品は、まさに「語り部」としての機能を持つのではないだろうか。いつも一括りにされてしまう秋田のイメージを多彩なものにしてくれる。「なんもない」は、ふるさととは「物語の宝庫」といえる。

もしそうであるならば、作者と読者が作品世界を共有できることが大切で、出会ったことのない事柄でも違和感なく受け入れられるようにするには、やはり作者の表現力によるところが大きい。書きたいことを書くことが、そのまま

読者に伝わるかどうかについて検討願いたい。

選に漏れた「百年前の修学旅行」は、あらゆる点でおもしろかった。今や車で一時間ちよつとの道のりが百年前の少女たちにとってどれほどの大冒険だったか、今となってはさびれゆく一方の街並みが華やかに煌めいていた当時の様子を少女たちと同化したかのように見ることができた。少女たちの冒険やそれぞれに抱える悩みや希望、小さな物語の集成が巧みに描かれていた。この作品が出典の不備のために選に漏れてしまったことを残念に思う。

若手の作者による「雨降りの夏」について、改めて感じたことは、会話で物語を展開することの難しさである。まして漂う「空気感」を讀者と共有するには、相当の表現力を要する。「なんかいいよね」と読者に思わせるには、その「なんか」の正体を作者がことばで表現できなければならぬのではないだろうか。

応募作品の中に展開がしりすばみになってしまった作品がいくつかあった。書き出しはおもしろいのに、終わりに近づくにつれて、展開が強引になって語りの視点がどこにあるのかわからなくなったり、結末が曖昧になったりと、読後、違和感が残るのをもったいなく思った。

作品を生み出すことがいかに難儀なことであるかを、選考を通して改めて実感させられたが、どのような要素が作品のおもしろさを引き出すのかについての気付きを与えてもらった。小説・評論に関する知識も経験も、執筆に情熱を注ぐ応募者には到底及ばないのは承知の上での意見である。



記録とステレオタイプを超えて

山崎 義光

小説であれ、評論であれ、ステレオタイプ化していない、何らかの発見的な見方や固有の世界観を導くものであるかどうかを念頭に選考しました。

受賞作「大文字の見える街から」は、昭和三七（一九六二）年に大館に住んでいた五歳の少女ゆりの視点から始まっています。七〇年代前半に高校生になるまでの大館の街、「大文字の見える街」を背景に、祖父母、両親、近所に住んでいた大人の半生や友だちとの交流が描かれています。少女の視点に限定されながらも、

物語られた世界に厚みと奥行きを与えているのは大館の街の様子や習俗習慣、時代の制約の中で生きた人々の半生が垣間見えるところです。少女の目線で、ある年代の街と人の固有な感情を描いたところに読みどころがあります。

街を背景に、祖父母や両親たちがどう暮らしてきたかというファミリー・ヒストリーが、少女の体感実感をもって描かれていたところに、代替不可能な価値がにじみ出ていると感じました。ただ、「三」の終わりあたり、ゆりが小学生から中学生の頃の出来事は駆け足で進み、「四」では「作者」が登場して物語のモチーフを語って、高校生に成長したゆりの視線で描いたところは、やや平板な感じがしました。これは、高度経済成長を経て街の表情が移り代わっていく世相のせいでもあるかと思いましたが、幼いころの目線と違った、成長したゆりの体感実感がもう少し書けるとよかったという印象が残りました。題名に含まれる「大文字」は、昭和四三（一九六八）年に始まった街の年中行事として出てきます。それは物語の展開が省筆された頃に始まっています。題名と物語の展開を照らし合わせて読むと、「大文字が見える」ようになる前の部分の方が緊密に描けていると感

じるせいで、ややピントがずれた感じが残りました。

とはいえ、ある年代の街の記憶が、そこで暮らした人とともに描かれていたところに惹き込まれました。今回投稿された作品には、受賞作以外にも「よいち物語―貧困と愛―」「百年前の修学旅行」「回想「水車の家」のおんちゃん」などが、やはり秋田のある年代の風景や人の姿を描き込んでいました。実際の記録などを参照しているものもありました。参考とした文献の扱い方には注意が必要ですが、こうした題材には場所の歴史をふまえ再現しながら、人と場所が不可分に描かれることの魅力があるように思います。もちろんその場合も、記録であることを超えた何かに届く緊密な言語表現たりえているかどうかというところが、小説としての価値になると思います。

逆に、記録として読まれる背景的要素がない題材で描く場合には、それに代わる要素がどれだけ緊密に描けているかという点で難しい挑戦になるように思います。「あの人は、いま」はSFファンタジー的な物語展開をもち、「雨降り夏」は少年たちが夏の祭りで集い、妖精のような少女に出会うことを描いていました。こ

詩

厳しく、貪欲に



堀江 沙オリ

うした作品では、記録に頼らずに物語世界の奥行きや人物の描き分けが求められます。その上で、出来事や人物をステレオタイプ化せずに描けることが大事な点になると思います。

「母の声」は、生命保険会社の横暴な上司に復讐しようとして、愛人の男に上司を騙ったウソの投資話を同僚女性たちにつけさせる、シングルマザーの女性を描いた野心的な作品でした。上司との関係、愛人との関係、そして厳しい母と主人公との関係、母親としての主人公と子の関係といった、主人公と周囲の人との複雑な関係が描かれていました。事件が落着すれば終わるわけではなく、また勧善懲悪の物語でもなくて、それぞれの人物が抱える欲望や屈折、その一方で、否応なく主人公の心に突き刺さる母の言葉が、紋切り型の道徳とは異なる倫理として描かれようとしたところに、挑戦的な発想がありました。もう少しそれぞれの人物を突き動かす意識化されない欲動が描けると読み応えが増したように思いました。

小川、蝉、秋風、雪。四季の感じ方は一人一人違うはずなのに、定型的な表現が多い。言わずもがなの表現、例えば「ドライブ」には「車」が含まれるので両方書く必要は無いし、主語や目的語を繰り返さなくても表現次第で十分伝わる。

だからといって読み手の知識を試すかの様な表現法を採る必要も無い。この位解って当然、解ってほしい、いや解らずとも読み手の勝手と丸投げしてもいけない。発した言葉の彼方には必ず受け取る人間が居る。自分の作品を一度、初めて読む人間になり切り、客観的に対峙して読んでほしい。老若問わず、自分の周囲の「当たり前」が読み手にとって当たり前でない事を考える必要がある。但し、特殊な読ませ方と振ったルビが逆効果になってしまう事も多々あ

る。表記の仕方には細心の配慮が必要だ。

年配者は難解な言葉を多く知っているのに、それを難解と思わず使用しがちだが、平易な表現に変換した方が良い詩になる事もある。若い人はネットと仲が良い。吸収する力があるので、読んだ一節に類似する表現を無意識的に使う可能性も高い。作品表現がオリジナルなら文句無しに推した詩でも、ネットで類似表現を目にした読み手が一人でも居れば、選外にせざるを得ない。だからといって決して委縮はせず、様々な文化と接し、新たな刺激を求め、それを詩という形で表現する事を止めないでほしい。可能性に年齢制限は無い。年配者も様々な経験や文化に新たに接し、表現の可能性を広げ書き続ける事を願う。

『あの世に本は持っていない』ユーモアと皮肉が軽やかなタッチで綴られ、私と妻と本との関係性が浮かび上がる。最終にもう一押しの説得力を。『学寮』年配者の醍醐味。表現に無駄が無い。作者の人生の重さ、複雑な思いに筆力を感じる。中盤に解りにくい箇所がある。『ありがとう』独自の季節観、特殊な状況下での運命的な出会いが良い。中盤が解りにくく、後半、表現がやや平凡になったのが惜し

い。『病を飼う』自分の心情を深く分析し、構成員のある作品に仕上がった。題名も詩の一部である。終盤、一步の説得力がほしい。

『人生道楽の勧め』冒頭から、若さの持つ力を感じた。視覚的表現への判断に迷う。一度、この部分を言葉に変換してみてもどうか。心情の凝視、暗から明への転換、冒頭と最終の対比が良い。対句と体言止め、題名に一考を。『道の途中で』何より発想が良い。想像力は詩を産む。細部と終盤に一層の推敲を。『花』平易

な言葉で素直に綴る詩があっても良い。丁寧だが重複する表現が多い。『蛇鑿の寿命』書き慣れた人の構成員と筆力。会話部分の推敲を。『ノート』丁寧に書かれた詩。ノートの内容を

素材にした詩も読んでみたい。『写真』構成員に優れ、心地よいシャッター音が聞こえる。次は一枚の物語を詩にしてみよう。『新しい自分』なりたいたい自分像の裏側に今の自分像が透

けて見える。エールを送りたい詩。『御盆』奥深い十七歳の死生観。確かな家庭像が見えて来る。心の成長の記録を今後も綴ってほしい。

若い人の作品で、誕生を個人的表現法で綴った詩、思い切ったテーマに挑戦した詩、日常への観察眼に優れた詩群など、読んでいてはっと

させられた。分かり易さと独自性は相反するも

のではない事を踏まえた上で、今後も書き続けたい詩に思った。年月の末、言葉にした決意を非とせず、今後も学びつつ表現してほしい。

繰り返すが、詩作に早い遅いは無い。表現する事に限界は無い。自分の言葉で、ある意味貪欲に書き続けられ、言葉の側から、いつか近づいて来てくれる。私もまたそう信じて書き続けている。



豊かな詩の森の中で

佐々木 久 春

選考の結果は最優秀賞なし、奨励賞三篇、入選五篇という選考委員全員協議の一致した結果になった。

奨励賞第一席「あの世に本は持つていけない」は、多くの人が悩む「断捨離」を描いた。

最終段落、いざ捨てる段になると捨てる本を入れた紙袋を前に胸がざわめく。「うつうつたる気持ち」か、読まずに来た「うしろめたさ」か

「本のつぶやき」か、見事な締め括りの最終段落九行である。

第二席は「学寮」。後悔を伴う「永遠の依所」——「より所」なる学寮、多くの人にとってイカロスの翼であっても、私にとっては幻かも知れぬが矜持を取り戻す青春時代の遺産だということ、切なく描いている。

第三席「ありがとう」は新型コロナウイルスと戦う看護師への謝辞と献辞である。姿の判然としない手強い敵でも君の「笑顔」と「元氣」に癒され、かつての春も小鳥もギリシャ神話を語る夜空の星々も必ず蘇る、と歌い上げる。

以上三作品ともに、切なく迫って来る心を描いてすばらしい。

入選作品には次の五つの作品を選んだ。第一席は「病を飼う」である。老女(母)に付き添う作者の心情である。付き添って疲れた自分の心にこそ透明な多くの病がひた寄せてくる。その病の群に支配されず飼ひならず、「病を飼う」ことがこれからの自分の生き方だ、と作者は言う。

第二席は「人生道楽の勧め」。ふり返ってみれば「自分はいったい何をしてきた」「空虚への焦燥と不安」、自分への「憤慨と失望」この

言葉を軸として作者は暗から明へ世界を大きく
転回させる。そうするとなんと明るい果てしな
く広がる空か。「神秘と擬態」の偉大な世界の
パラドックスを同一面に据え、生への確信を得
る。というように一ひねりも二ひねりもした世
界を提示していく。

第三席は「道の途中で」。ずうっとこれまで
歩いてきたが、いつ知ったのだろうその記憶も
曖昧だがうつつすら小さな「扉」が見えていた。
どこに続くのか誰かに聞いたことはあるのだが
この扉。それから注意して見た。するとウグイ
スがさえずりセミが鳴き風に吹かれる木々のざ
わめき、心騒がしい時はすっかり忘れていた、
それらが彼方にずっと続いている。彼方を見て
歩きつづけよう。作者の新しい視覚の発見を見
事に描いている。

第四席は「花々祖母の教え」。 「花」は生
と死という相対的な時間の変化を越えて「花」
であるという祖母の教えを伝える。それは「お
だやかな日溜まりの中」の「やさしい教え」で
あった。それが祖母の死後も「わたしの中に
咲き続ける」 静かに読者の私たちの心を打つ
詩行である。

第五席「蛇鑿の寿命」という作品。「独り暮

しの老女」の話である。若い大工が、止まった
蛇に刺されてたまるかと蛇を追い払おうと降り
まわした鑿で自らを刺して命を失ったという。
話を終わって一息ついた老女が「ああ早く春来
ばえな」とからから笑って、詩は閉じられる。
超越した軽みが見られる。

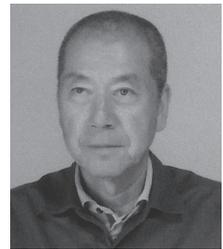
グリーン賞は、伸びしろの期待される四篇を
選んだ。いずれもかがやく詩句がおどつてい
る。

*

抒情詩は、喜怒哀楽、感情と知性が綯い交ぜ
のすぐれた結晶である。各行の一篇への集大成
は実に難しい。しかし逆に言えば、一篇の詩に
は心打たれる詩行が必ず見られる。その集成が
詩作の苦しみと喜びであろうか。詩を書くわれ
われは、共にその研鑽を目指したい。

ただ、今更ながら近頃特に思うのだが、詩を
書くのはどうしてなのか。この問題をどう解決
したらよいか。書くから書くのだ、という答
えは擱いて、やはりこの問題を常に考えていく
必要があるのではないだろうか。

詩同人「北五星」 主宰、秋田県現代詩人協
会・日本現代詩人会会員、日本詩人クラブ名誉
会員、秋田大学名誉教授



成田豊人

なぜ今詩を 書くのか

応募作品四十一篇をしつかりと読ませて頂き
ました。応募者の年代が十代から九十代までと
幅広く、さらに十代の応募者が十一人と一番多
く、頼もしく思います。しかし、最優秀賞に該
当する作品がなかったことは残念です。また、
新型コロナウイルス禍に関連した作品がほぼ皆
無なのは少し意外でした。全体的に見て構成に
甘さがあること、描く対象を見る目が凡庸なこ
と、言葉に対する配慮が不足気味なことが気
になりました。詩が書けそうだと胸がむずむずし
筆記用具を手にした時、なぜ今詩を書くのか、
もう一度冷静に考えて頂きたいと思えます。

奨励賞 あの世界に本は持っていない
老い先が見えた愛書家の悩みが、小気味良く
ユーモラスに描かれている。「読み切れない本
は／あの世に持っていけないだろうか」が印象
に残る。妻の「口撃」が現実を引き戻し効果
的。最終連はもうひと工夫欲しい。

奨励賞 学寮

人生修行の中にあつて夢にまで見ながらも後悔を重ね、自分らしい自分を矜持を持って取り戻そうとする。その葛藤の在り様には共感を覚えた。しかし、題が適切かどうか。また、最終の唐突さも気になった。

奨励賞 ありがとう

入院中の作者は接してくれる看護師との出会いを運命的と感じ、その笑顔、言葉、元気さの持つ力を畳みかけるように描いている。最後の「ありがとう」は説明的であり、作品全体の中でこの気持ちを表現すべきだった。

入選 病を飼う

「老女」の付き添いで病院に行くうち病気に罹る。病気が自分を理解してくれる唯一の友のように感じるという疎外感が痛々しい。最終連が少し説明的でありひと工夫欲しい。

入選 人生道楽の勧め

両掌を見つめ自己嫌悪に陥りながらも解決の方法を見出し、「それでも世界はこんなにも偉大」と認識できる程の前向きさに救われている。ただし、題は再考の必要がある。

入選 道の途中で

道を歩いていてある日突然扉が見えた。この

扉がどこに続くのか、作者にも明確ではないし読者も色々考えさせられて面白い。四連目と五連目はもう少し推敲すべきだった。

入選 花々祖母の教え

「花は／枯れても花だ」という祖母の教えが印象的。祖母に対する愛情に溺れず、教えを冷静に受け止め、ラストに上手く繋げている。ただ繰り返しの部分が多いのが惜しい。

入選 蛇撃の寿命

地域の伝承を方言も混ぜながら、しっかりとした構成でまとめている。語る老女の描写には凄みがある。三連目が主題と言うべき「老少不定」の説明になってしまったのは残念。

グリーン賞 ノート

作者にとりこのノートは自分の分身である。どんな事を書いているのか、自分にとりどんな意味を持つのか、畳みかけるように描いていて好感が持てるが、もう少し推敲の用あり。

グリーン賞 写真

とてもリズムミカルで若々しい言葉の運びとなっている。写真を撮る目的がしっかりと描かれているが、「それは／とってもステキなことだと思っから」の二行は必要だろうか。

グリーン賞 新しい自分

新しい自分を目指し夢を見ているだけではなく実行しなくては、と力強く自分に言い聞かせている点は好ましい。理想とする内面の変化についてもさらに書き込んで欲しかった。

グリーン賞 御盆

感情を極力抑え事実と情景のみで、生れて間もなく亡くなった兄を追悼しているのは評価できる。御盆、線香などの仏教用語と、天使というキリスト教の言葉が噛みあわない。

*詩誌「komayumi」同人

*秋田県現代詩人協会会員・日本現代詩人会

会員

短歌

選を終えて



菅原 恵子

◎最優秀賞「秋田城趾」

千二百年前に思いを馳せ、現代の科学にも目を向け、歌に厚みを感じられる。歴史とロマンのある近年にない新鮮さ、深みがあり確かな作品群である。

- ・「波流奈礼波」官使の恋の木簡はねむりつつけて千二百年
- ・科学もて千二百年を緋けば血液B型その子は男子

◎奨励賞「津軽」

津軽への郷愁を、たんたんと表現。作品が穏やかなぶん心打つ。

- ・父母眠る津軽に聳える岩木山裾野を広げわれを迎える
- ・見覚えのある古き文字目に入りぬ看板業の兄すでに亡し

◎奨励賞「花の風」

花嫁の父である夫の心情と、新婚の二人の未来の幸せを祈る作者の心情が素直に伝わる。

- ・父と佇つ花嫁の背にやはらかきステンドグラスの光彩が差す
- ・六月の薔薇咲く庭を行く二人われの知らざる明日を歩む

◎奨励賞「夏の大地から」

身近な生活詠で臨場感あふれた作品群。

- ・揚げ茄子のからむ醤油に誘われて釜の白飯売れ行き早し
- ・素麺の細さの似合う暑き日に冷房入れず窓を開けおり

◎入選「夏の午後」

一首の中にもっとする詩情が広がる。

- ・七月の白きビーチに西瓜割り割り切れぬもの裡に抱へて

◎入選「参拝」

単なる描写ではない味わい深く個性的。

- ・敷石は釈迦像までのアプローチ心は既に合掌整う

◎入選「日暈の下に」

老母への愛おしさと挽歌。共感できる。

- ・ぱつかりと埴輪のやうにひらきたる口より去

りぬ母のたましひ

◎入選「山の径」

山好きな二人のようすを描き心打つ。

- ・三たびなる入院のりこへ山頂をめざすふたりの春山の径

◎入選「子吉川の岸边」

子吉川の今の姿と思ひ出を叙情的に表現。

- ・手ぬぐいにメダカすくいし浅瀬今草原となる歳月はるか

◎入選「球児たち」

作品のむらが気になるが明るく纏めてい

- ・ホームラン打ちし球児の突き上げる拳の果ての青空深し

◎入選「道の駅」

道の駅の光景を生き生きと表現している。

- ・イベントに海鮮市のひらかれて生きてる蟹がよきによき招く

◎グリーン賞「夏薫る」

若い方の何色にも染まっていない作品に共感。

- ・夕暮れに変わり続ける空の色たまには立ち止まって見ようか

※他に「ぬるいコーヒー」の相聞歌にも心ひかれた。

清書にあたっては、原稿用紙の一番上から書き一行目が一杯になったら、二行目の一番上から書いてほしい。◎や番号不要。

「うたは人なり」つまり貴方の人格が作品に出るのである。短歌は文学の中の文芸の一つで、歴史も古しいし、報告や描写にとどまらないこと。心の目でも喜怒哀楽の情（思い、気持）を表現してほしい。沢山のご応募に感謝しつつ、ご健詠をお祈りしたい。

※略歴

- ・秋田さきがけ短歌選者
 - ・現代歌人協会々員
 - ・かりん同人
 - ・かりん秋田誌発行人 等
- 住所 019-2112 大仙市字刈和野四五六



選歌寸評

打矢 京子

最優秀賞 「秋田城趾」

・「波流奈礼波」官使の恋の木簡はねむりつづけて千二百年

秋田城は天平五年（七三三年）創建の古代城柵である。律令政権の日本最北の城柵でもあった。厳しく重要な城柵であったが、万葉仮名の木簡の恋歌が発見された。当時の人々の人間らしい心が千二百年の時空を超えて今の我々の心に届く。

・形代や齋串の類のまじない有り コロナ祓いを願いたき今夏

コロナ流行の現代、葉もワクチンもない状態ではこの歌の気持がよくわかる。

その他一連の作品に体言止めが多くあったのと上句と下句の推考が必要な一首があったのが今後の課題に思われた。

奨励賞 「津軽」

・両の手に小皿カチカチ打ち鳴らす亡父の得意の津軽手踊り

岩木山、立佞武多、津軽鉄道などふる里津軽の風景に作者の想いがより添っている作品群であった。とりわけ掲出歌は、父上の津軽手踊りの様子が生き生きと詠われて素晴らしい作品である。

奨励賞 「花の風」

・新郎へ娘を託す任終へし夫が漏らすかすかな吐息

「ご息女を慈み育んでこられたこれまでの歳月と幸せを願う親の思いがあふれた瞬間でもあるのだろう。下句は特に男親の複雑な面が感じられる。

奨励賞 「夏の大地から」

・草引きて三枚拾う蟬の羽根 私は羽根を何処に落とせし

草取りをしていて蟬の羽根を拾ったことから一転下句の作者自身に移る。ここでは希望や夢を実現するための力なのだろう。誰もが心の隅に抱く喪失感が表現された。

入選 「夏の午後」

・七月の白きビーチに西瓜割り割り切れぬもの裡に抱へて

西瓜割りの行為と胸のうちの対比が鮮明。三句は西瓜割るの方が引き締まるのでは。

入選 「参拝」

・仏像に向き合う夫と片言の経本読みて道標問う

経本を読みつつ仏像に道標を問うと解釈した。真摯な生き方が伝わってくる。

入選 「日暈の下に」

・耳元に母の好みの七種の秋咲く花を指折りていふ

初句の耳元は母の耳元だろう。母への労りと愛情があふれている。

入選 「山の径」

・三たびなる入院のりこへ山頂をめざすふたりの春山の径

入院を乗り越えたのは作者なのだろうか。そうでなければ工夫が必要と思う。情景佳。

入選 「子吉川の岸辺」

・手ぬぐいにメダカすくいし浅瀬今草原となる歳月はるか

幼い頃から親しんできた川の浅瀬が草原となり、歳月の移ろいがはつきり捉えられた。

入選 「球児たち」

・土壇場のエラーには触れず球児らは笑顔で語る「力尽くした」

全力を尽くして試合をした球児たちの爽やかな笑顔が浮かぶ。

入選 「道の駅」

・早蕨をきれいに束ね市女らはレシピ説くとき秋田訛で

市場の光景が秋田訛の結句でより鮮やかになった。二行書きは必要なのだろうか。

グリーン賞 「夏薫る」

夏の日々が感覚的に切り取られている。

※他には内容的に良くても瑕があったり、一首独立に欠けるなど惜しい作品があった。

(「運河」同人・日本歌人クラブ会員)

秋田県歌人懇話会会員)



選歌短評

福岡 勢子

最優秀賞 「秋田城趾」

○「波流奈礼波」官使の恋の木簡はねむりつづけて千二百年

○形代や齋串の類のまじない有り コロナ禍をお願いたき今夏

○かつて子のスキー遊びのこの岡は天平びとのお祓いの沼

これらの作品にみられるように「秋田城趾」は、天平時代の生活や文化のあとでもあったことをこの作品で知った。遺跡発掘で出てきたものだけに焦点を当てるのでなく、コロナの問題や子どもとの思い出にまで作品の幅を拡げており、特選として申し分ない。

奨励賞1 「津軽」

○両の手に小皿カチカチ打ち鳴らす亡父の得意の津軽手踊り

津軽から秋田に嫁いできた人の望郷の作品であるが、ただ津軽を恋しく思っているのではなく、津軽に赴き、看板業の兄の看板を目にした、立佞武多や岩木山、鰯など風土の特徴をうまくとらえて一首にしている。構成もよく抒情豊かな作品となっている。

奨励賞2 「花の風」

○父と佇つ花嫁の背にやはらかきステンドグラスの光彩が差す

○きざはしを降る二人に花の風白きヴェールが空にためたふ

旧仮名使いで、娘の結婚式を詠った作品であった。喜びを具象に語らせて情感を抑制したのが効果的であった。二首目の「漏らす」は「漏らせる」とした方が調子が整うし、題もなった四首目の「降る」は「降りる」とした方がリズムがよくなると感じた。

奨励賞3 「夏の大地から」

○揚げ茄子のからむ醬油に誘われて釜の白飯売れ行き早し

夏の食生活を支える茄子、胡瓜、トマトを一首に入れて日常生活を詠い、また蝶や蟬の物語

へと広がりを見せて、日常生活の豊かさが感じられた。最後の作品は、一字あけを効果的に使い、リズムを整えている。

入選1 「夏の午後」

○カッコウの声は水輪となり遙か向かうの空へ広がる真昼

郭公の声の広がりを「水輪」と喩えたのが新鮮であった。三首目の「割り切れぬもの裡に抱へて」や四首目の「水中花」は既視感があった。自分の感情を表に出さず、色や声で表現し、工夫されていた。

入選2 「参拝」

○山門は背負い来し荷の荷扱い所本堂までの足どりは軽く

何か想うところがあって、ご主人と参拝に行かれたときの作品。短歌は二行書きではなく、一行書きであることを知って欲しい。参拝の敬虔な気持ちがよく出ていた。

入選3 「日暈の下に」

○耳元に母の好みの七種の秋咲く花を指折りていふ

介護施設に入所の母の看取りや、死などを客観的にとらえて詠まれている。

入選4 「山の径」

三回の入院を乗り越えて来られたご主人との登山の作品である。自分に引き付けて詠まれている。

入選5 「子吉川の岸边」

生まれ育った「子吉川」を主題に自己投影が効果的であった。

入選6 「球児たち」

高校野球の殿堂「甲子園」での試合はコロナのため今年は変則的であった。球児たちの姿を的確にとらえて、素晴らしさを伝えた。

入選7 「道の駅」

旅人を和ませる道の駅の風情をつぶさに見て詠っている。前の方にも書いたが、短歌は一行書きでお願いします。

グリーン賞 「夏薫る」

○夕暮れに変わり続ける空の色たまには立ち止まって見ようか

口語発想で若若しい作品であった。

短歌結社「好日」編集委員。日本歌人クラブ会員。県歌人懇話会理事。

俳句



感動や詩のある
俳句を

岩谷塵外

私の選句基準は次の通りである。

- ①一句の中に感動や詩があるか。
- ②句の内容が読者に分かってもらえるか。
- ③「季節」が適切か。
- ④類想句はないか。

最優秀賞「米作り」

- ・代掻きし田の面に生氣満ち溢る
- ・太陽と早起き競ふ田植どき
- ・稲を刈る八十八手の総仕上げ

米作りの喜びが銜い無く表現されている。句の骨法がしっかりしており破綻がない。

奨励賞「山陰の村」

- ・山陰に六戸の村や雉子高音
- ・うぐひすの声澄み渡る谷間かな

山陰の村の春の様子が明るく捉えられている。切字の「や・かな」が余韻を深めている。

奨励賞「廃鉢の跡」

・選鉢の女工の歌か蟬時雨

・カドミウム除染せし田や稲たわわ

鉢山の今昔が眼に浮かぶようである。どの句も季題が功を奏している。

奨励賞「羽後抒情」

・日輪のまだ濡れてゐる路の臺

・ひとさしゆび天地を指す盆踊

句それぞれに詩があり、郷土愛が感じられる句群である。

入選「夏書」

・いつしかに色無き風や経納む

難解な句も混じるが、母に対する思慕が鏝められており共感した。

入選「乳癌」

・諦観の眉の清しさ春隣

掲句の季題「春隣」に作者の快癒祈願の一念が感じられ胸を打つ。

入選「合歓の花」

・禅院の静寂に合歓の花明かり

・気負いの無い穏やかな句柄に惹かれた。

入選「快復祈願」

・リハビリに快復の夢風薫る

掲句の季題「風薫る」に快復が間もないこと

が窺え、一縷の光明が感じられる。

入選「白神抄」

・蕎麦咲きて朝の白神雲隠れ

白神賛歌の句群である。大振りな句柄と平明な表現が魅力的である。

入選「潟の周辺」

・青蘆の女潟光の男潟かな

掲句の観察眼の鋭さに惹かれた。切字「かな」が効いている。

入選「母」

・背を丸め夜なべの母や野良着縫ふ

昭和を生き抜いた在りし日の母の姿である。母への鎮魂の句に感銘した。

入選「風」

・蓮の花風の高さに咲きにけり

句すべてに「風」が感じられる。掲句の措辞「風の高さに」が手柄である。

入選「田植」

・早苗植う此の地この土いとほしき

農家としての誇りと土への愛情が感じられる。明るい句柄に惹かれた。

入選「青胡桃」

・青胡桃ここに尽きたる羽後の徑

掲句の大きな句柄に惹かれた。

入選「天高し」

・躓きて傾ぐ鳥海山天高し

どの句も俳味に溢れており感銘した。掲句の季題「天高し」が効いている。

入選「田の整理」

・どつしりと森吉見えて青田風

圃場整理の状況が良く纏められている。掲句の措辞「どつしり」に惹かれた。

グリーン賞「昔日」

・ランドセル駆けて駄菓子屋蟬時雨

若さに溢れた句群である。有季・定型が順守されており感銘した。「継続は力」を信じ、更なる研鑽と活躍を期待する。

秋田県俳句懇話会会長・公益社団法人日本伝統俳句協会会員・同東北支部事務局長・俳誌「ホトトギス」同人・同東北同人会会長・公益社団法人俳人協会会員・俳誌「百鳥」同人・秋田市住



七句の詩的 実存世界

和田 仁

俳句は度々、リアリティの詩世界だと言われる。

読み手の想像に過分に任せる「一句鑑賞」と違い、「七句鑑賞」の場合、否応なしに、作品の深奥、作者の実存・生き様、生命感覚、つまり人格・美意識・作句意図にまで触れることに為る。

また、読み手にとつて、この多様多彩な提示・イメージを楽しむステージであると同時に、時に、この提示への自らの対応能力不足・配慮不足を思い知らされる場にも成り兼ねない。

最優秀賞「米作り」

- ・太陽と早起き競ふ田植どき
 - ・稲を刈る八十八手の総仕上げ
 - ・大いなる明日を夢みる刈田道
- 感情抑制が程良く、颯爽として心地佳い。
テーマに添ったイメージを多様に的確に（雑味

なく）見事に描出。俳句ならではの技巧の成熟を感受。

奨励賞「山陰の村」

- ・山守の裔の六戸や山を焼く
 - ・焼く山に村の長老切火打つ
- 凡庸になりがちなテーマから抜け出し、独自の視点に忠実に朴訥に七句に結実。郷愁を誘う安寧の世界を表出。

奨励賞「麁鉢の跡」

- ・寄進者に鉢山の名残る職かな
 - ・選鉢の女工の歌か蝉時雨
- 蓄積した俳句表現技術をもって、視点に工夫を凝らし、そつなく多彩に一連を描出。沈着な表現にして、作者の血の温もりが伝わってくる。

奨励賞「羽後抒情」

- ・草餅や語尾にこの付く羽後言葉
 - ・まなざしの直ぐな少年青林檎
- テーマに添った多様な作品を一作品として、作者の努力の結晶として提示。誠実な作風も魅力。

入選「夏書」

- ・郭公の声のみけふの夏書の間
- 入選「乳癌」

・諦観の眉の清しさ春隣

入選「合歡の花」

- ・曲屋に木馬嘶く合歡の風
- 入選「快復祈願」

・激痛に神をも呪ふ熱帯夜

入選「白神抄」

- ・弾み来る白神川瀬稚魚放つ
- 入選「濁の周辺」

・青蘆の女濁光の男濁かな

入選「母」

- ・独活届くひらがな並ぶ母の文
- 入選「風」

・蓮の花風の高さに咲きにけり

入選「田植」

- ・田植笠歳を刻みし赤い紐
- 入選「青胡桃」

・昼月はいつも色白青胡桃

入選「天高し」

- ・廃校にまだあるバス停梅擬
- 入選「田の整理」

・わが田撮る遺影のやうに浅き春

グリーン賞「昔日」

- ・口開けて座って譲らぬ扇風機
- 若さはデリケートにして貴重な財産。更なる

飛躍に期待します。

※人生の一コマを語る追想追慕の句が、圧倒的に多く見受けられた。(人生の慰労か。激励か)

秋田県国際俳句協会会長

秋田県現代俳句協会副会長

国際俳句協会会員

天為同人



齋藤 淳子

選を終えて

この度の選で感じたことは、七句を作品にするにはかなりの力量が必要であるということだった。題の付け方、並べ方、モチーフをどう活かしていくかなど繊細な感覚が働く。そのことを踏まえながら応募句に寄り添い心して選をさせて頂き、私も大変勉強になった。

最優秀賞『米作り』

干拓の大地生き生き種を蒔く

代掻きし田の面に生氣満ち溢る

干拓の大地にそよぐ青田風

大いなる明日を夢みる刈田道

稲作りの過程をテーマに添って力強く、しっかりと詠い力量ある作家である。四句目のなお

明日へ夢を託す心意気が清々しい。

奨励賞『山陰の村』

山陰に六戸の村や雉子高音

山焼の太初の火色猛り立つ

山焼の了えたる村や星明り

山陰の寒村を生き生きと描き、詩情豊かに表

現した作者の技倆に瞠目した。

奨励賞『廃鉱の跡』

廃坑の口黒ぐろと山ねむる

採鉱の痕より雪解始まれり

選鉱の女工の歌か蝉時雨

かつては鉱山で栄えた町。繁栄の陰には様々な物語があったと思う。独自の作者の視点で時

代を切り取り、歴史の重みを感じる。

奨励賞『羽後抒情』

日輪のまだ濡れてゐる路の臺

ひとさしゆび天地を指す盆踊

小鳥来る結びに繋がる母郷かな

一句目。路の臺が顔を出す頃の季節感を詩情

濃く詠い心引かれた。三句目は「結び」に繋がる村の絆をよく表出している。

入選『夏書』

郭公の声のみけふの夏書の間

郭公の甲高い澄んだ声が静謐な時間を紡ぐ。

入選『乳癌』

諦観の眉の清しさ春隣

大変な経験をされた作者。掲句の明るく前向きな姿勢に救われる。

入選『合歓の花』

花合歓や沖ゆく白き旅客船

花の紅色と旅客船の白のコントラストが、遠

近法によって見事に表出されている。

入選『快復祈願』

繰り返すブロック注射片時雨

次々と襲う痛みを時雨を聞きながら耐えているのだ。季語が効いており共感できた。

入選『白神抄』

白神嶺背に海へ向く墓洗ふ

良き環境に恵まれた墓域。手に力が隠る。

入選『潟の周辺』

夏の日や農学校のチャイム鳴る

聞きなれた音だが、今日は格別に身に沁みる。心の弾みがそうさせるのかも知れない。

入選『母』

背を丸め夜なべの母や野良着縫ふ

秋の灯に濃き影を落し、母の夜は更けていく。

入選『風』

蓮の花風の高さに咲きにけり

写生の効いた句。感覚の冴えを感じる。

入選『田植』

植多し田に満たす命の水奏で

水は命を繋ぐ源。奏でる水は豊作の予兆だ。

入選『青胡桃』

青胡桃ここに尽きたる羽後の徑

季語の力によって奥行のある句になった。

入選『天高し』

昼寝覚め主婦の素顔に戻りけり

主婦は昼寝から覚めても、又多忙な時間だ。

入選『田の整理』

父祖の土息あげ盛られ夏の雨

中七の措辞が効果的だ。夏の雨が悲しい。

グリーン賞『昔日』

また明日言えた青春名残り雪

有季定型の诗情の濃い句群である。青春の今しか作れない瑞々しさが横溢しており、感動した。今後の活躍に期待したい。

〔俳誌「海」「草笛」同人。公益社団法人俳人協会会員〕

川柳



長谷川 酔 月

新鮮味ある 作品を！

今春以来のコロナ禍により、県内の川柳大会や各吟社の例会が軒並みに中止や延期、誌上句会となっているが、こうした状況の反動だろうか、応募が昨年より七篇多い五十四篇という結果であった。

今年の特徴的傾向として、各選者の事前審査の結果に大きな差異がなかったと言ったことが出来る。特に上位作品は選者三名の合点で異議なく決定した。またそれ以下の作品についても、選者の好みに違いがあるものの、比較的すんなり決まった。

グリーン賞候補として、久々に十代の応募があり新鮮な作風に好感が持てたが、造語の表現

などがネックとなり、残念ながら賞には該当しなかった。今後の研鑽に期待したい。

文芸性を競う場である以上、最低限心すべきこととして、誤字脱字や禁止用語等の入ったものは論外としたほか、類想句や暗合句の有無、文芸的には疑問の多い破調句等について厳正にチェックを行った。

その上で、文芸性や新鮮味の有無、作品全体の安定性、題名との整合性等が重要なポイントになった。

最優秀賞 揺れる想い

- ・ 淋しくて紅を引いてる梅雨最中
- ・ 投げかけた言葉の重さ月欠ける
- ・ 燃え残る台詞ひとつを胸に抱く
- ・ わが底の花ひとひらにある追慕

三名の選者が上位に推した作品である。情念句を中心とした作品群で女性作家を思わせる。全体を連作風に仕立てており、余韻の広がり何ともいい。

奨励賞 風の言葉

- ・ 夕暮れのわたしの恥部を陽が照らす
- ・ 安らぎの風の言葉に乗るわたし
- ・ ちちははと同じ定め舟にのる

具象句と抽象句を程よく混ぜていい雰囲気

醸し出している。視点の広がりと共に、一連の作品群からはドラマ性が感じられる。

奨励賞 日日新た

・愛一途直滑降の日もあれば

・胎動へ君のページを抱き寄せる

・日日新たやさしい風に生かされて

日常の中から句材を見つけて、雰囲気の良い作品に仕上げている。全体的にしなやかな作風であり、実力ある女性作家を想像する。

奨励賞 薔薇の唇

・身の丈をこえた望みか不意の雨

・ひとり居の女の鎖骨風の途

・薔薇のよな唇からの変化球

ドラマ性を感じる作品群であり、実力作家を思わせる。惜しむらくは全体に漢字が多く、硬い感じがするので一考を要したい。

入選 ころろ

・漱石のころろ葉が忙しない

・写経する無の字に心入れながら

・減っていく花瓶の水にみた命

日常を題材にしながらも、視点の意外さが魅力的な作品群である。句の並べ方に一工夫ほし

入選 幸せタイム

・通りゃんせ戸口は少し開けておく

・騙されていましよう愉しげなうわさ

・風向きも雲の形もお友だち

メルヘン調の作風がいい雰囲気醸し出している。説明句の混在に留意したい。

入選 春の目覚め

・脈のある話だお辞儀深くなる

・波長合い一会の華となるルンバ

・さあ春だ父の一途が目覚ます

よくある事象を詠んで納得できる。句の配置が巧みであり、ドラマを感じさせる。

入選 輪の中に

・皆笑顔私も入れて輪の中に

・楽しみがあると信じて歩んでる

・迷路から導き照らす星あかり

全体に素朴な作風であり、句に安定感がある。視点の更なる広がり配意したいところ。

入選 道

・青い辞書抱いて明日へ迷わない

・旅発って母の翼は濡れている

・寄り添って心に満ちる大落暉

手慣れた作品群である。ベテラン作家を思う。

秋田県川柳懇話会会長

(一社) 全日本川柳協合理事

川柳銀の笛吟社主幹

秋田市八橋住



主役は人です

高橋 三鳩枝

人にはそれぞれの想いや考え方があり暮らし向きも種々雑多。川柳と云う短詩文芸に自分の想い考え方を表すことで生き甲斐を感じ暮らしの源として、自分を表現する。

あきたの文芸は半世紀以上の歴史のある文芸イベントであるからにして、それに相応しい、そこを踏まえての作品でなければならない。

最優秀賞 揺れる想い

向き合って心はいつも擦れ違い

嫺やかに揺れる女の恋ごころ

燃え残る台詞ひとつを胸に抱く

評 男も女も想いは揺れる、作りの巧さは感性が成せる技。まるやかなまとまりに読む

人をほっとさせる。

奨励賞 風の言葉

カラフルに生きてみようか一ページ

安らぎの風の言葉に乗るわたし

夢ひとつ座った椅子が揺れている

評 シンプルな題名のなかに奥行きを感じさせるテクニクはさすがだ。

奨励賞 日日新た

愛一途直滑降の日もあれば

胎動へ君のページを抱き寄せる

信じ合う比翼の旅は終わらない

評 日常生活で起こりうる事象を上手くとらえる天性は作者だけの世界を彷彿させる。

奨励賞 薔薇の唇

身の丈をこえた望みか不意の雨

遅咲きの花に合わせる深呼吸

変化球リボン結びの蝶になる

評 題名はユニーク。高得点の作品であったが、五句目と六句目との繋がりに難があり長い議論でここになりました。

入選 ころも

欲捨てた心一番強い時

入選 幸せタイム

ワルツ踏む月影さしてくる窓辺

入選 春の目覚め

脈のある話だお辞儀深くなる

入選 輪の中に

皆笑顔私も入れて輪の中に

入選 道

奔放な夢が駆け出すクレヨン画

入選に今一步の作品。次回に期待したい。

農の道

春の風天の教えの米作り

睡のしびれ

淀みなく論すことばに冷奴

半迦思惟

眠らない枕の下の邪悪たち

マイーウエイ

もう迷わない終章のスニーカー

実力

実力はキャッチボールで読まれてる

今回は五十四の作品が応募されもちろん入選等を期待しておると思われませんが、選考の対象にならない作品は二十六。

題名の貧弱、雑詠七句は題名ではない、コロナ禍、時事、まつりごとを詠まれた作品は比喩

椰揄が露骨になりがち故に文芸川柳には不向き類の作品は心してもらいたい。

応募者は昭和生まれが大半を占め、年代は激動の時代であり、今のデジタル時代を即受け入れるのは困難であろうが、つまりは昔を良かったの作品は随所に見受けられた。思いは解らないでもないが、これからの世、明日を見つめて明るい未来と捉え、思い付きの羅列でなく推敲にはたつぷりの時間が必要と認識しよう。もともと川柳は座の文芸でありそこで学びはきつとプラスになる。今回は十代の作者の作品があり、入選とはならなかったが短詩文芸に挑む姿はこれからが楽しみでありライフワークの一つとしてもらえればと願う。

秋田県川柳懇話会副会長

川柳花清水 主宰

美郷町土崎字上野乙一の六十五

評価の観点



宮腰流木

川柳は、人間の心を慰め癒し明るい気持ちにするもので、頷かせる大衆文芸ともいわれる。今回、選にあたり皆様の力作に感謝します。

五十四の連作句の傾向は、高齢化時代を反映して回顧回想句八、日常生活の時評的な句九、健康と古い、家族との絆の句十、コロナの句八、以外の句十九であった。

選の視点観点は

○基本的な川柳の作法として、誤字脱字、字余り、「背骨が曲がっていないか」つまり中七の確かさ、下五の安定感、問いかけ、頷きの有無。

○発想の奇抜さや思いつきになっていないか、思いつきを真似ていないか(類句)。

○内面的なものを表す手段として比喩の類想になっていないか。

○連作ですから七句と題に頷きが感じられるか、リズムが一句から七句までの流れの中に感じられるか。

主題は、表現に盛り込もうとする作者の主要な命題です。そこには句を貫く中心思想として大衆文芸の川柳らしさが求められます。

○句の組み立て方が良いか、下五の余韻の工夫はあるか。漢字、利き字(字眼)の有効さ。

以上の視点を、バッドマークで選をいたしました。コロナの句については、今日私たちの身近な問題として、体験も情報も共有しているだけに、どうしても着想が類似してしまいます。したがって句そのものが常套的になってしまいます。さらに七句の連作となればどこかで誰かと繋がって(類句類想)しまい競吟には向かない時事句なのかも知れません。

独り善がりの造語(言葉)は楽屋句になりやすいので注意することです。

川柳は、表現として言葉の集まりです。その言葉を理解して表現されているか、題をうまく表現する事と、自分らしさが貫かれていればそこに個性的な力作が生まれます。

今回は、選者三名の合点で各賞が決まりました。

最優秀賞 「揺れる想い」

七句通して発想の把握を体験に置き換えている。理屈っぽくならないのは、上五に下五の共感を喚起するレトリックの巧みさにあり、判りやすい。人情として当たり前の事象を詩的機知で表現され主題が全句に流れてすばらしいドラマを思わせる。

奨励賞 「風の言葉」

和やかで明るい句の流れが伝わってきます。相反した一句と三句連作ならではの納得があり頷かせるものがあります。

奨励賞 「日日新た」

川柳の求める「かるみ」のある句。
下五の体言止めと終止止めの配分がよく連作に効果的です。現在は隠喩の時代といわれますが各句のメタファが明るく分かりやすい。

入選句、「輪の中には、下五の座りが効いて読み手に共感をあたえます。「道」は利き字が見事で意の深さを感じました。「幸せタイム」は川柳は判りやすいことが大切です。競吟にはユーモア句はあまり見られないが、二句と四句が楽しい。「春の目覚め」漢字には意味が

あり利き字としての用法が良いと思う。何よりも共感するものがあり分かりやすい。

三百七十八句の中、単句ではすばらしい句を拝見いたしました。去年より参加者の増えたことは喜びでした。皆様のご健吟祈念申します。

現 川柳あきた吟社主幹
前 秋田市川柳協会会長

エッセイ



澤井 範夫

選考を終えて

令和二年に入って早々、新型コロナウイルス感染症が大きな社会問題になり、いまだ先行きが見通せない状態が続いている。

今年の応募作品は昨年より四篇多い二五篇だった。この中で六篇が新型コロナウイルスについて記述していた。書かれている内容はそれぞれ違っていたが、この問題が私たちの暮らしに大きな影響を与えていることを今さらのよう

に知った。

父をはじめとする親族の死や病を素材にした作品も七篇ほどあった。生老病死は世の常ながら、ここ二、三年のうちで兄や義兄弟きょうだを立て続けに四人亡くした私には他人事のように思えなかった。

私は、エッセイを読むのが好きである。作者の人柄や人間性が行間からしみじみ滲み出ているエッセイや、人生の機微を日常の生活の中から掬いだしているエッセイに巡り合えた時、私の喜びは大きく深い。

今回の選考にあたっては、私のこうした想いを満たしてくれた作品を高く評価した。

最優秀賞の「ゆずり葉とおしゃべり男」は、想が実によく練られていて見事だった。読み手を惹きつける書き出しから、「ゆずり杠」という多分誰もが読めないであろう名字との出会いを、満員電車の若者へ、さらには河井醉茗の詩へと結び付けていく話の流れは巧みだ。結末のエピソードはこの作品を味のあるものにしていった。作品全体を覆っている軽みとおかしみが、人生のたそがれ時のもの哀しさを和らげていた。

奨励賞の「平気で生きていく」は、突然の姉の死とその思い出から生れた作者の死生観を描

いている作品だった。結末の正岡子規の言葉は、高井有一がのこした「死ぬ者は死に、生きる者は生きる」に繋がると、私は受け止めた。短文で畳み掛ける文体は、この作品を躍動感あるものにし、渡り鳥の描写や縄とび歌はこの作品を情感あるものにしていった。

奨励賞の「お地藏様のお祭りとおげメダレ」は、題と書き出しが情趣に富んでいた。柔和で、落ち着いた筆致は作品を気品あるものにしていった。お地藏様の描写は印象深く、作者の観察眼の確かさを感じた。少子高齢化や過疎化が一層進む中で、地域の風習がどれだけ続いているか、と考えさせられた作品でもあった。

奨励賞の「雑木林の道の歌」は、亡き母の時代には許されなかった保呂羽山登山から得た作者の感懐と、新型コロナウイルスの鎮静を願う作者の姿を描いた作品だった。この作品の山場である「雨の歌」以降では、豊かな作者の感性と郷愁がうまく混じり合っていた。簡潔に表現された結末はこの作品を引き締め、読み手を清々しい想いにさせてくれた。

印象に残った他の作品にも触れておきたい。「フナ尾がつないだ縁」は、縁があつて長年飼ってきた七匹のフナを、ある気づきから二人

選評

中尾 信一



の孫と一緒に川へ放す作品だった。話がやや単調なところは物足りないが、平明で淡々とした筆致や、余韻のある結末は読み手を惹きつけるものがあった。

「土あそび」は、作者を含めて老境に入った三人の男の畑仕事を中心に描いた作品だった。三者三様の土づくりの様子は面白いが、人間を描くことに意を尽くして欲しかった。

「最後の数学の授業」は、作者の高校時代の最後を振り返った作品だった。数学の先生と作者のやり取りには迫力があり感心した。ただ、読み手の心に響く何かが足りず、印象がうすれたのが惜しかった。

「義父の戦争」は、心身に戦争の傷跡をかかえながら愚直に生きた義父の姿を描いた作品だった。作者の義父へのあたたかい眼差しはよかったが、話の流れや結末がいささか安易だった。表記にも注意が必要だった。

今年の応募作品は、昨年より全体的に質が揃っていて甲乙つけがなかった。紙数が尽きて取り上げることが出来なかった作品も粒揃いだった。書き続けていくことは大変だが、来年も応募することを期待したい。

今年度の最優秀賞「ゆずり葉とおしゃべり

男」は、「稀有な名字」との出会いの話。散歩の途中で見かけた「杠」という表札の読み方を知りたくて、大胆にも隣家の人に話しかける。自らを「おしゃべり男」と呼んでそれを正當化しているが、その背後に見える照れとユーモアがほほえましい。唐突に、電車で若者に席を譲ってもらった話に移行し、老いについての自らの思いが語られる。そこで引用されるのが、「ゆずり葉」という詩。「世代交代」という「世の仕組み」を謳うこの詩は、作者の心情を見事に語ってはいるのだが、冒頭の「稀有な名字」との結び付きはまだ見えない。亡くなった義母をめぐる出来事やと、「杠」という名字の葬儀担当者との出会いが訪れる。稀な名字―おしゃべり男―老い―世代交代―親族の死。これらのエピソードが、「ゆずり葉」という一語によって緩くつながったまま、最後に凝集し、強い印象を残したまま終わるその構成が

見事だ。日常の何気ない「もっともらしさ」と、その背後にあるエッセイとしての「巧みさ」とが、上手く均衡を保っている。

今回の応募作品は「人の死」を題材としたものが多かった。現在のコロナ禍の社会を覆う漠とした不安や恐怖と無縁とは言えない。

奨励賞の「平気で生きている」もまた、作者の姉の死を扱っている。冒頭、弘前に住む姉の異変を聞いて、吹雪の中を特急列車で向かう幻想的な場面が印象的だ。その直後の警察も関わることになる姉の死をめぐるリアルな描写と好対照をなしている。氣遣う気持ちはありながら、あっけなく逝ってしまった姉への思いが、罪悪感となって作者を苦しめる。死とはこういうものだと思いつける一方で、帰る列車の中で昔の歌をふと思いついてしまう自分が、「薄情」に思えてしまう。たとえそれが姉と思いつける歌だったとしても。正岡子規の言う通り、「悟り」とは「平気で死ぬこと」ではなく、「平気で生きること」だと自分を納得させようとする作者の思いが痛々しく迫ってくる。

奨励賞「お地藏様のお祭りとアゲメダレ」も、幼くして亡くなった子を弔う「化身」としての「お地藏様」の話。年に一度その地域で行

われる、お地蔵様を洗い清め、新調した前垂れ「アゲメダレ」をつけ替えるお祭り行事が舞台である。「アゲメダレ」には、「赤い」と「新しい」の意味が含まれているという。この言葉の神秘的で優しげな音の響きに引き付けられる。さらに例年の行事の進行過程が、冷静な観察眼と的確な筆致で描写される。その筆遣いを下支えているのは、義理の兄の「化身」であるお地蔵様とそれを守ろうとする地域の伝統行事への愛着であろう。そしてコロナ禍の今年、その行事は例年とは異なった進みゆきとなる。

筆者は多くを語らないが、その祈りはお地蔵様にだけでなく、この現代の疫病に倒れた見知らぬ人たちにも向けられているのかもしれない。

奨励賞「雑木林の道の歌」は、山の奥深くにある文化財の神社への登山の話。それは、同じ登山道を結婚する前に歩いたという作者の母の、「懐かしい」「幻影」に導かれていく行程でもある。表参道の雑木林の道をたどる際の風景描写は、読み手の歩調に合わせているかのようには確だ。かつてはその神社が「女人禁制」だったため、母が途中で引き返すことになった登山道を、作者は目的地まで登りきる。下山の

途中、神社の記入帳に書いた言葉の誤りに気づき、引き返して書き直すか、そのまま下山を続けるか、小さなサスペンスが生まれる。突然、母の思い出につながる曲が頭に浮かび、その母のために、神社に戻って誤字を書き直す決断をする。劇的な結末にしては、静かにあっさりと言われているのだが、登山道を辿り直すことでしか伝えきれない母への思いは、過不足なく読者に伝わってくる。読者を巧みに導いていく説得力のある文章だけがなしうることである。



多彩な作品群を 読んで

柴山 芳隆

最優秀賞に輝いたのは「ゆずり葉とおしゃべり男」である。「杠」という漢字の読み方を散歩中に教えてもらった作者が、義母の死後の手続き中に遭遇した「杠」姓の担当職員と出会う話であった。構成が巧みで全体的なまとまりもよく、河井醉茗の引用も生きている。どこかに小説風な要素が感じられる点もおもしろい。ただ、表題のカギカッコは不要だし、数字の表記

に一貫性がないのも気になる。そうした細部まで配慮が行き届くようになれば作品全体の完成度はさらに上がっていくであろう。

三篇が奨励賞を受賞した。「平気で生きていく」は、弘前に住む姉の突然の死に関わる経緯をまとめた作品だが、リアリティ豊かで迫真力に富む。エッセイのような散文は、善悪美醜を偏りなく見てありのままに叙述する散文精神に基づいて書かれなるとよい作品にはなっていないものである。この作者はしっかりとした散文精神の持ち主であることが強く感じられた。

秋田の方言を生かした「お地蔵様のお祭り」と「アゲメダレ」には、過疎の村の大事な風習が丁寧に描かれている。頭で書いたものは読み手の頭にしか届かず、心で書いたものが相手の心に響いていくものだが、この作品は頭で書いた部分と心で書いた部分のバランスがよくて読み手の共感を誘う。もう少し深みがあればと思った。

「雑木林の道の歌」は、亡き母を偲ぶ心理的距離感が絶妙で感心した。こうした内容は概してベタベタした印象になりがちなのである。ブラームスのヴァイオリンソナタの逸話が生きていて一篇にふくらみを与えていたが、この作品も、全体的にあと一步の踏み込みがほしかった。

た。

惜しくも賞は逸したが、気になる作品も少なくなかった。「土あそび」は家庭菜園に関わる体験と感慨を述べた一作である。自分以外の二人の人物を描いている点は効果的に機能しているものの、自分をもう少し前に出してほしかった。英文学者で評論家でもあった厨川白村は「エッセイにとって何よりも大切な要件は筆者が自分の個人的色彩を濃厚に出すことである」と説いている。「伯母の文芸誌」は、書き継ぐ歴史の大切さといったものを教えてくれる一文で、歴史性と文芸性が程よく調和している点が良い。形式名詞「こと」の頻用が文章に稚拙な印象を与えていて気になった。「ギリシャ雷文を巡って」は、国際性豊かな作品で、調査や考証が行き届いているし、文章もしっかりしている。ただ、作者の姿がほとんど見えない点のエッセイとしては残念であった。心で書いた部分がやや不足している故であろう。

「菅江真澄終焉の地を訪ねて」は文題どおりの内容で、よく調べよく記録している。ただし、報告の域をあまり出していない憾みも遺った。報告に留まっている作品はこのコンクールでは毎回のように見られるが、今回で言えば

「リメンバー」「義父の戦争」「我が人生を語る」等がその範疇に入る。「中学生になった君へ」は花岡鉦山の問題を中心にして平和の尊さを訴えている。引用部分が長すぎて全体のバランスを欠いていた。

新型コロナ禍で還暦を迎えた女性が桜を通して心境を語る「桜」は、原稿用紙の使い方のマナーが良いとは言えない。「電信柱の役目」も、同じようなことを指摘できる作品であった。他人に読んでもらうことが前提の文章の場合はそのところまで配慮がほしい。釜石で行われたラグビーのワールドカップの試合を題材にした「闘球観戦」は、“釜石の奇跡”の印象が強すぎてラグビーそのものはやや後景に退いてしまっていた。「テロロとアカシヨウビン」の作者は、文章を書き馴れるともっとよい作品を仕上げられるようになるに違いない。「最後の数学の授業」は分量不足である。この内容だと倍近い長さが必要だし、募集要項に照らしてその余裕もある。

他にも触れたい作品があるが、残念ながらここで紙数が尽きた。

あきた県民文化芸術祭2020「あきたの文芸」応募状況

1 部門別（応募作品数）

	小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ	総数
R2年度	10	41	63	91	54	25	284
R元年度	10	40	60	77	47	21	255
H30年度	12	36	51	98	47	23	267
H29年度	13	52	67	88	55	33	308
H28年度	9	32	72	84	57	24	278

2 男女別

	小説・評論		詩		短歌		俳句		川柳		エッセイ		総数	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
R2年度	7	3	10	31	23	40	51	40	37	17	16	9	144	140
R元年度	6	4	14	26	26	34	42	35	30	17	13	8	131	124
H30年度	7	5	14	22	23	28	57	41	27	20	9	14	137	130
H29年度	7	6	15	37	31	36	50	38	37	18	15	18	155	153
H28年度	6	3	11	21	35	37	54	30	38	19	12	12	156	122

3 年代別

	総数	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	不明
R2年度	284	22	6	3	10	18	51	98	69	7	0
R元年度	255	20	4	1	10	23	49	89	55	4	0
H30年度	267	10	4	7	8	21	49	91	74	3	0
H29年度	308	20	6	7	10	28	52	105	75	5	0
H28年度	278	6	7	8	6	11	59	98	72	10	1

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代
小説・評論	1	0	0	0	1	6	1	1	0
詩	11	1	1	3	7	8	5	4	1
短歌	2	4	1	2	2	8	22	19	3
俳句	7	2	0	2	3	12	34	30	1
川柳	1	0	0	1	2	9	29	10	2
エッセイ	0	0	0	2	3	8	7	5	0

4 新旧割合（作品数）

	小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ	総数
再	7	32	46	71	46	19	221
新	3	9	17	20	8	6	63
計	10	41	63	91	54	25	284

再…以前にも応募したことがある方
 新…今回初めて応募された方

5 月別応募数

6月	7月	8月	計
28	41	215	284

あきたの文芸 昨年度の入賞者と作品名（入選・グリーン賞を除く）

第五十二集（令和元年度）応募二百五十五作品

・小説・評論部門

奨励賞 古川善六「夢のごとく」

・詩部門

奨励賞 金万和「星空」

奨励賞 小林康子「のこりの刻」

奨励賞 小松春美「何処へ」

・短歌部門

最優秀賞 堀内和佐「夏」

奨励賞 鈴木直子「高尾山の気」

奨励賞 佐々木鏡子「荒びゆく庭に」

奨励賞 佐々木義幸「石の階」

・俳句部門

最優秀賞 石井美智子「山の日」

奨励賞 佐々木成「太子堂」

奨励賞 佐々木豊「ジオパークの里」

・川柳部門

最優秀賞 菅原浩洋「心の軌跡」

奨励賞 荒木小菊「兄弟愛」

奨励賞 佐藤啓子「太陽と月」

奨励賞 大滝静「親と子」

・エッセイ部門

最優秀賞 蓬田真弓「プリンセスの王冠」

奨励賞 鈴木護「ゆきしんしん」

奨励賞 豊葦瑞穂「ねえ、サンフラワー」

編集後記

◎令和二年度あきた県民文化芸術祭2020
「あきたの文芸」入賞作品集『あきたの文芸
第五十三集』を刊行しました。

この作品集は、十六歳から九十四歳までの応募作品二百八十四編より、最優秀賞四編、奨励賞十六編、入選二十九編、二十五歳以下の文芸活動を応援するグリーン賞六編、計五十五編を掲載しております。

◎この事業は、あきた県民文化芸術祭2020の一環として実施しております。応募いただいた皆様をはじめ、文芸団体や広報協力をしてくださった各市町村、報道機関、図書館などの文化施設、さらには、事前審査から選考・校正まで多大なる御協力をいただいた選考委員の皆様には深く感謝申し上げます。

◎「あきたの文芸」は、今後もより読みやすく親しみやすい郷土を代表する文芸誌として、一層充実させていきたいと思っております。

あきたの文芸第五十三集

あきた県民文化芸術祭2020

「あきたの文芸」入賞作品集

令和二年十一月十三日

発行・編集

秋田県

(観光文化スポーツ部文化振興課

電話 〇一八―八六〇―一五三〇)

共催 一般社団法人秋田県芸術文化協会

秋田県教育委員会

印刷・製本 株式会社三森印刷

たくさんのご応募 ありがとうございます！

応募総数	284 作品
入賞	49 作品
小説・評論	1 編
詩	8 編
短歌	11 作品 77 首
俳句	16 作品 112 句
川柳	9 作品 63 句
エッセイ	4 編
グリーン賞	6 作品
詩 短歌 俳句	



フンカDEゲンキ
はごちからから！


あきた県民
文化芸術祭
2020

あきたの文芸第53集
入賞作品集
令和2年11月
発行・秋田県（非売品）

photo:「うぐいす坂より」2018 Fukai Fumiko ©